ＦＤ・ＳＤ活動報告書

（令和元年度）

鹿児島大学大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻
［教職大学院］

ＦＤ・ＳＤ活動報告書（令和元年度）

１．ＦＤ・ＳＤ研修会

２．ＦＤ会議

３．ＦＤアンケート

４．ＦＤ座談会

５．授業リフレクション

６．教育相談Ｄａｙ

７．授業参観週間

１．ＦＤ・ＳＤ研修会

本年度は、恒例のＦＤ研修会を事務職員も加えた形式に改善し、ＦＤ・ＳＤ研修会を開催した（２回を計画）。また、教育学部と連携して、合同の研修会を開催した（２回）。さらに、鹿児島市立伊敷中学校との共催で教職ジョブトレ＆カフェを実施することができた（独立行政法人教職員支援機構の支援事業）。詳細は以下のとおりである。

No.	名称	実施日	内容
1	第１回ＦＤ・ＳＤ研修会	10 月 29 日	・講演：岐阜大学における教職大学院と教育委員会、学校現場との連携の歴史と今後の取組 講師　岐阜大学　吉澤寛之 准教授 ・ワークショップ：各教育委員会や学校の研修の実態と、教職大学院や教育学部に期待する研修プログラムについて
2	第２回ＦＤ・ＳＤ研修会	2 月 29 日	講演：教育工学的な視点に基づく教師教育の理論と実践 講師　大阪教育大学　木原俊行 教授 ※新型コロナウイルス対応のため中止
3	教育学部との第 1 回合同ＦＤ・ＳＤ研修会	9 月 17 日	講演：無気力状態に陥った学生への理解と対応 講師　鹿児島大学教職大学院　関山徹 准教授
4	教育学部との第２回合同ＦＤ・ＳＤ研修会	10 月 15 日	講演：不登校学生の復帰支援で注意すべきこと 講師　鹿児島大学保健管理センター所長　伊地知信二教授
5	第１回教職ジョブトレ＆カフェ（鹿児島市立伊敷中学校との共催）	8 月 9 日	講師：長野県教育委員会学びの改革支援課義務教育係 谷内祐樹 指導主事
6	第２回教職ジョブトレ＆カフェ（鹿児島市立伊敷中学校との共催）	12 月 10 日	講師：鹿児島大学教職大学院　廣瀬真琴 准教授
7	第３回教職ジョブトレ＆カフェ（鹿児島市立伊敷中学校との共催）	2 月 22 日	実践発表：兵庫教育大学附属中学校、石川県能美市立辰口中学校、鹿児島市立伊敷中学校

２．ＦＤ会議

ＦＤ会議とは、教職大学院の①ＦＤ・ＳＤ活動のあり方の検討、および②ＦＤ・ＳＤの具体的活動を行うための場である。学期中はほぼ毎週開催（30 分間～１時間）しており、出張等がない限り教職大学院の専任教員は全員参加している。内容としては、個々の学生の学習状況の確認・協議、授業リフレクションの発表・協議、アンケート結果の共有と改善策の検討、教育相談Ｄａｙ・授業参観週間・研修会等の諸行事の検討とふりかえり等であり、本教職大学院のＦＤ活動を日常的に支える機能を果たしている。

各回で扱った内容は次のとおりである。

回	実施日	内容
1	4 月 4 日	ＦＤアンケートの結果のふりかえりと改善策の検討 授業リフレクション
2	4 月 11 日	授業リフレクション
3	4 月 18 日	授業リフレクション 学生の学習状況
4	4 月 25 日	授業リフレクション 学生の学習状況
5	5 月 17 日	ＦＤアンケートの内容検討
6	5 月 23 日	教育相談Ｄａｙの検討 学生の学習状況
7	5 月 30 日	学生の学習状況
8	6 月 6 日	授業参観週間の検討 オフィスアワーの検討
9	6 月 13 日	学生の学習状況 教育相談Ｄａｙのふりかえり
10	6 月 20 日	学生の学習状況
11	6 月 27 日	学生の学習状況 授業リフレクション
12	7 月 4 日	ＦＤアンケートの結果のふりかえり
13	7 月 11 日	教職ジョブトレ＆カフェ（第１回）の検討 学生の学習状況
14	7 月 25 日	ＦＤアンケートの結果のふりかえりと改善策の検討 学生の学習状況 授業リフレクション
15	8 月 8 日	学生の学習状況
16	8 月 29 日	ＦＤアンケートの結果のふりかえり
17	9 月 12 日	ＦＤアンケートの結果のふりかえりと改善策の検討 教職ジョブトレ＆カフェ（第１回）のふりかえり
18	9 月 26 日	教職ジョブトレ＆カフェ（第２回）の検討
19	10 月 3 日	教職ジョブトレ＆カフェ（第２回）の検討

20	10 月 10 日	学生の学習状況
21	10 月 26 日	学生の学習状況
22	11 月 7 日	学生の学習状況
23	11 月 14 日	授業リフレクション
24	11 月 21 日	授業リフレクション
25	11 月 28 日	教育相談Ｄａｙの検討 学生の学習状況 教職ジョブトレ＆カフェ（第２回）の検討 院生談話室設置の検討
26	12 月 5 日	授業リフレクション
27	12 月 12 日	学生の学習状況
28	12 月 19 日	学生の学習状況
29	12 月 16 日	授業リフレクション 学生の学習状況
30	1 月 9 日	ＦＤアンケートの結果のふりかえり
31	1 月 16 日	学生の学習状況
32	1 月 23 日	学生の学習状況
33	1 月 30 日	ＦＤアンケートの結果のふりかえりと改善策の検討
34	2 月 6 日	ＦＤ座談会の企画 授業リフレクション 学生の学習状況
35	2 月 13 日	授業リフレクション 学生の学習状況
36	2 月 20 日	学生の学習状況
37	3 月 5 日	授業リフレクション
38	3 月 19 日	学習成果に関するアンケートの結果のふりかえりと改善策の検討

３．ＦＤアンケート

（１）本年度の結果

本年度も従来の質問項目を用いて、各ターム終了時にＦＤアンケートを実施した。実施期間および結果の概要については、下表のとおりである。各質問項目についての集計結果は、次ページに示した。

実施ターム	実施期間
第１ターム	６月１０日　～　６月１７日
第２ターム	８月　５日　～　８月１６日
第３ターム	１２月１３日　～１２月２０日
第４ターム	２月１０日　～　２月１７日

（２）開設後３年間の変化

本教職大学院の開設後３年間の変化をまとめたところ、17 項目のうち 12 項目の数値が向上しており、概ね改善傾向にあることが認められた。その詳細は、「本年度の結果」の次のページに示した。

ＦＤアンケート：令和元年度の結果

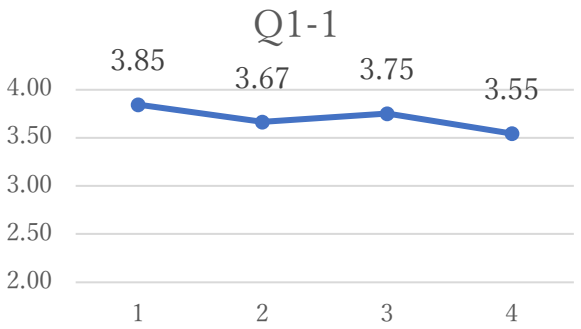
〇アンケートの方法　　無記名式
〇回答の集計方法　　次のように得点化してタームごと（Ｔ１～Ｔ４）に平均点を算出
　　４点：とてもよく当てはまる
　　３点：どちらかというと当てはまる
　　２点：どちらかというと当てはまらない
　　１点：まったく当てはまらない

- -

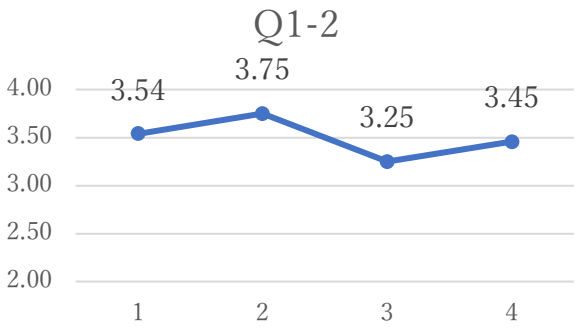
■　１年生の結果（回答者数：第１ターム 13 名、第２ターム 12 名、第３ターム 12 名、第４ターム 11 名）

【Ⅰ. 授業と実習の全体について質問します。】

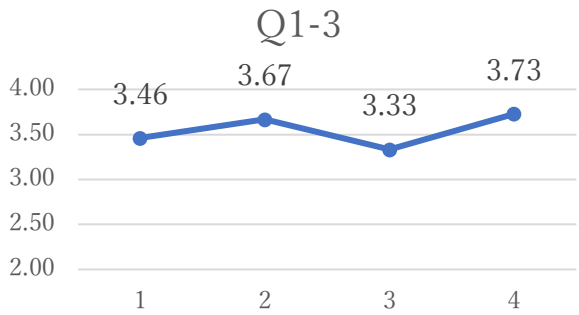
１）授業と実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか？



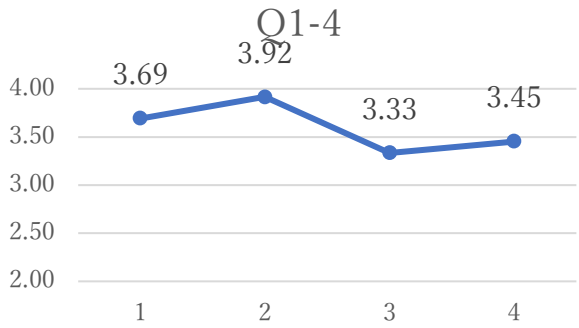
２）授業と実習の時間上のバランスは適切でしたか？



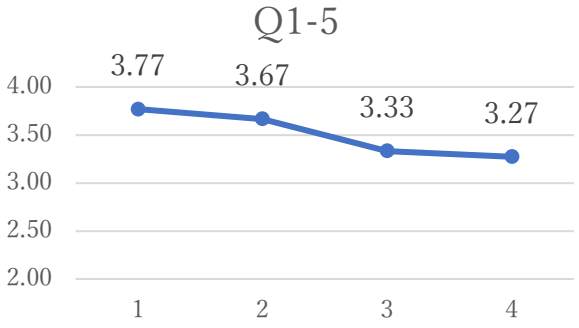
３）教育課程は、新しい学校づくりの有力な一員となりうる新人教員の養成ならびにスクールリーダー（中核的中堅教員）養成を果たすのにふさわしい内容でしたか？



４）教育内容は、教育現場における課題を積極的に取り上げ、その解決に向けた内容になっていましたか？



5）履修指導は適切でしたか？



6）施設と設備は利用しやすかったですか？

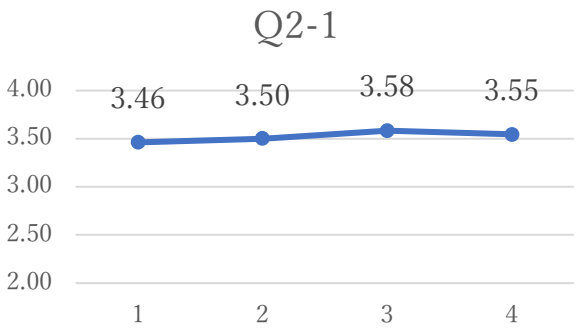
［自由記述のため割愛］

7）現職と学部新卒が一緒に学べるように授業が組まれていますが、いかがですか？

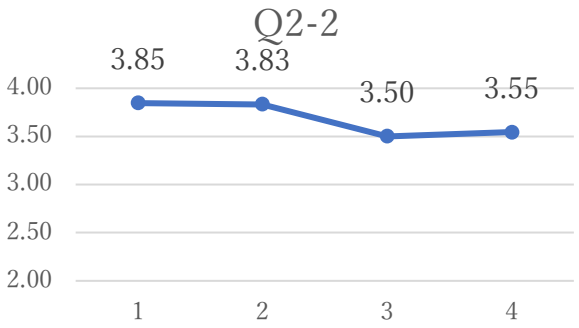
［自由記述のため割愛］

【 II. 必修科目について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？



2）教員の指導体制は適切でしたか？

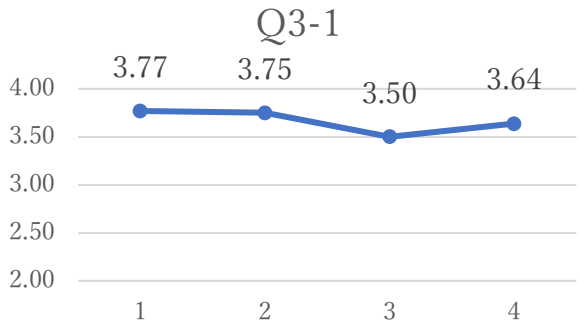


3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

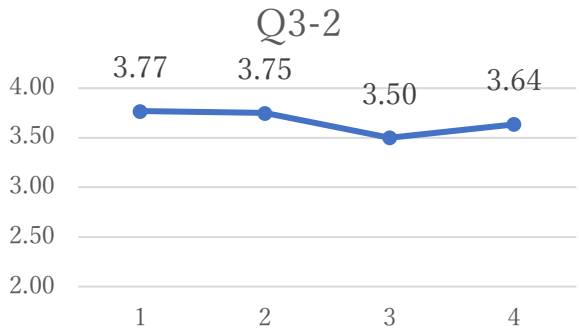
［自由記述のため割愛］

【 III. 選択科目について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？



2）教員の指導体制は適切でしたか？

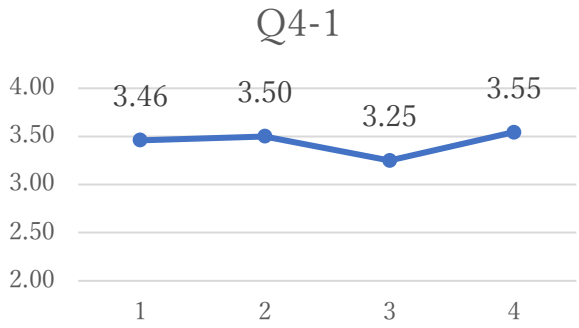


3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

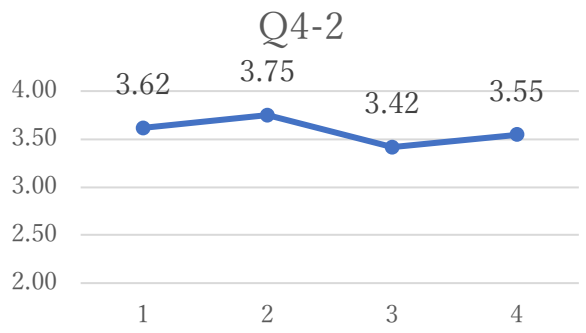
［自由記述のため割愛］

【 IV. 「教職課題研究 I」について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？



2）教員の指導体制は適切でしたか？



3）満足している点と改善してほしい点はありますか？ ［自由記述のため割愛］

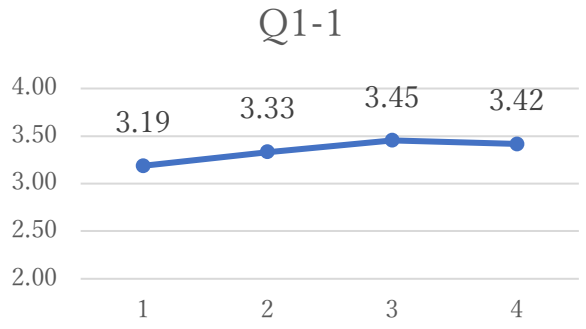
【 V. 授業以外および実習以外での教員の対応について要望はありますか？】

［自由記述のため割愛］

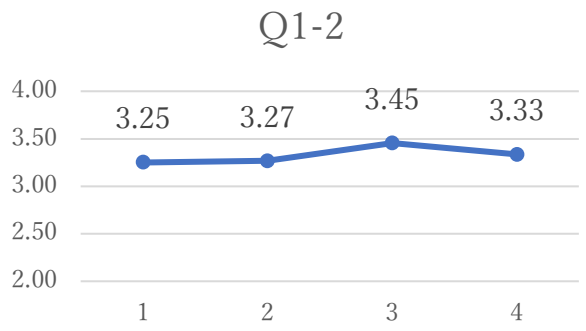
■ ２年生の結果（回答者数：第 1 ターム 16 名、第 2 ターム 15 名、第 3 ターム 11 名、第 4 ターム 12 名）

【 I. 実習について質問します。】

1）実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか？



2）実習の指導体制は適切でしたか？



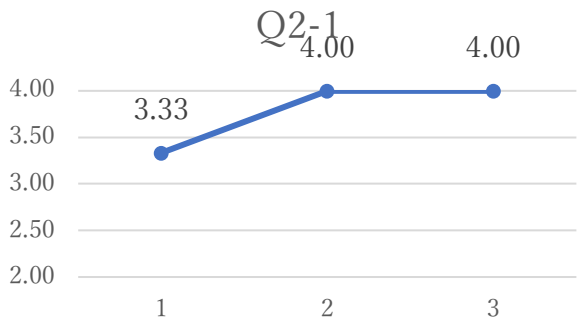
3）満足している点と改善してほしい点はありますか？ ［自由記述のため割愛］

【 II. 授業について質問します。】

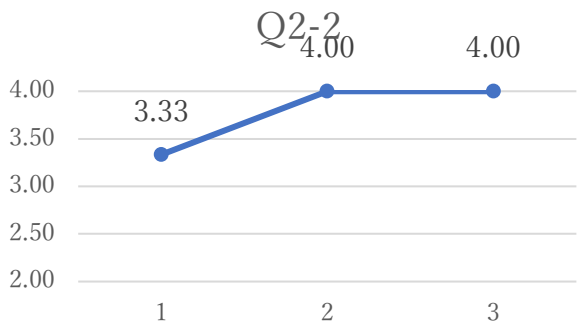
※「教職課題研究 II」以外

T1: N=3、T2～T3: N=1、T4: N=0

1）授業はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか？



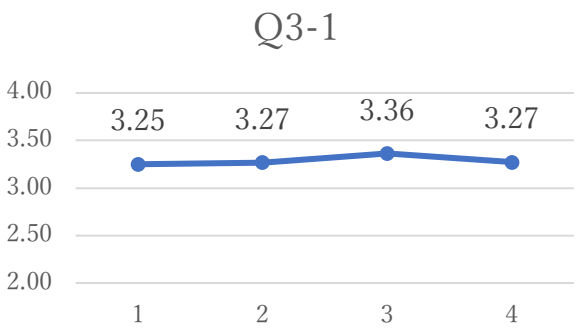
2）授業の指導体制は適切でしたか？



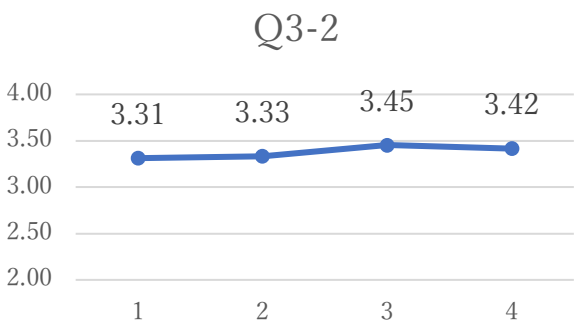
3）満足している点と改善してほしい点はありますか？ ［自由記述のため割愛］

【 Ⅲ.「教職課題研究Ⅱ」について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？



2）教員の指導体制は適切でしたか？



3）この授業では訪問授業や大学での授業を行っていますが、満足している点と改善してほしい点はありますか？　［自由記述のため割愛］

4）その他で、満足している点と改善してほしい点はありますか？　［自由記述のため割愛］

【 Ⅳ. 実習以外および授業以外での教員の対応について】

1）実習以外および授業以外での教員の対応について要望はありますか？

［自由記述のため割愛］

以上

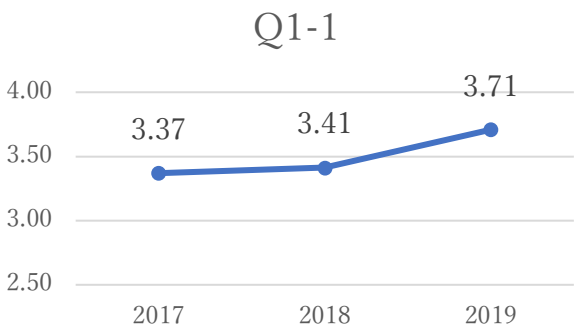
ＦＤアンケート：開設後３年間の変化

［ 開設後３年間：平成 29(2017)年度～令和元(2019)年度 ］

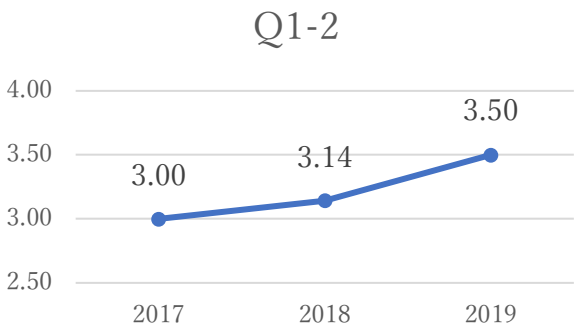
■ １年生の結果

【 I. 授業と実習の全体について質問します。】

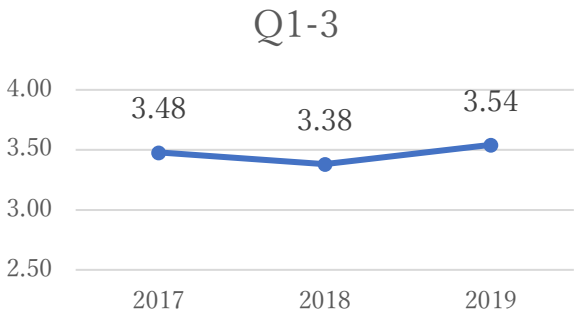
1）授業と実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか？



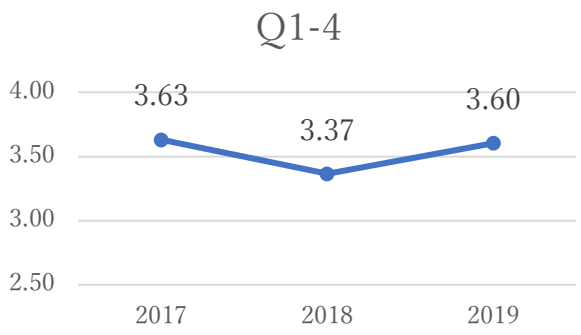
2）授業と実習の時間上のバランスは適切でしたか？



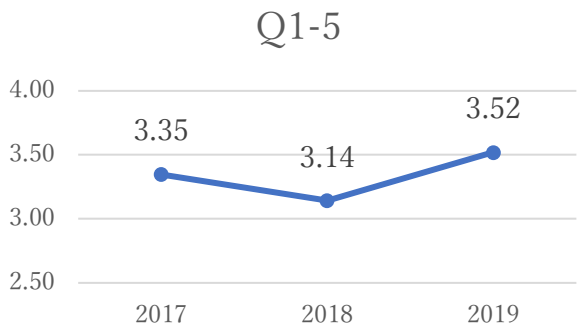
3）教育課程は、新しい学校づくりの有力な一員となりうる新人教員の養成ならびにスクールリーダー（中核的中堅教員）養成を果たすのにふさわしい内容でしたか？



4）教育内容は、教育現場における課題を積極的に取り上げ、その解決に向けた内容になっていましたか？



5）履修指導は適切でしたか？



6）施設と設備は利用しやすかったですか？

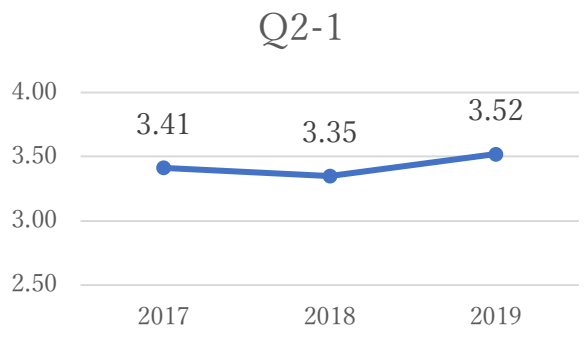
［自由記述のため割愛］

7）現職と学部新卒が一緒に学べるように授業が組まれていますが、いかがですか？

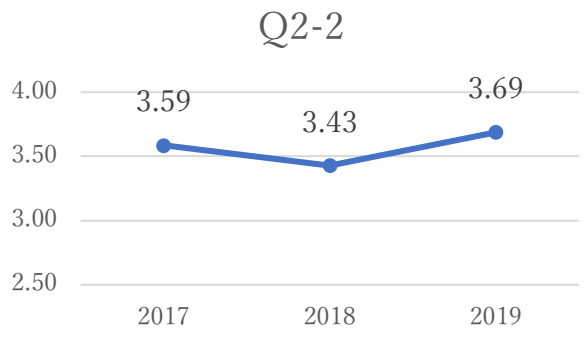
［自由記述のため割愛］

【 II. 必修科目について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？



2）教員の指導体制は適切でしたか？

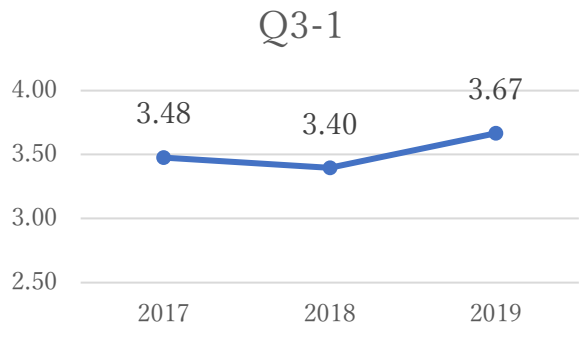


3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

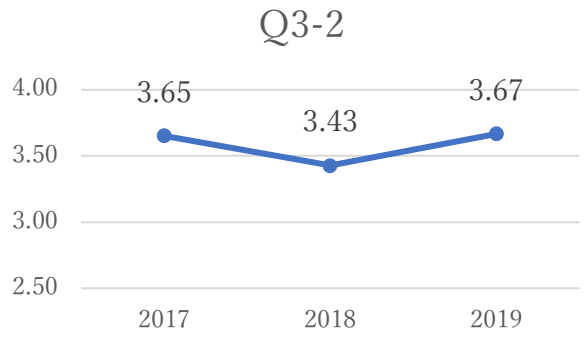
［自由記述のため割愛］

【 III. 選択科目について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？



2）教員の指導体制は適切でしたか？

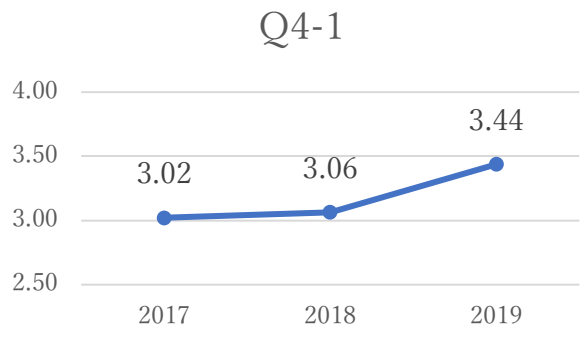


3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

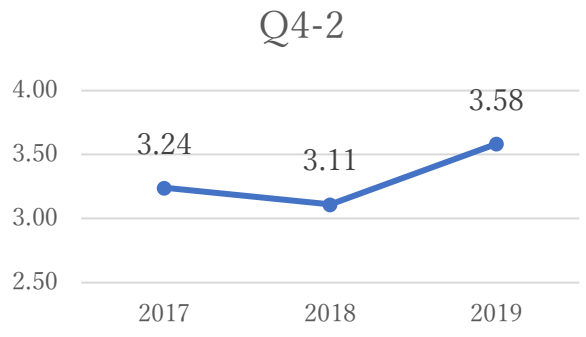
［自由記述のため割愛］

【 IV. 「教職課題研究 I」について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？



2）教員の指導体制は適切でしたか？



3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

［自由記述のため割愛］

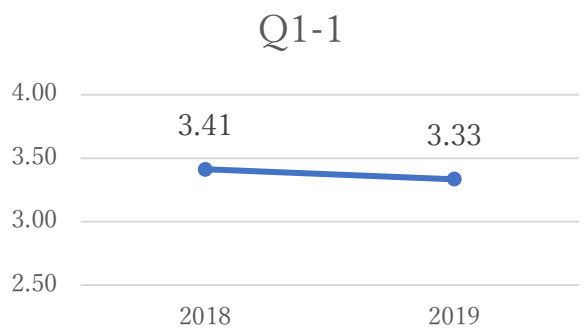
【 V. 授業以外および実習以外での教員の対応について要望はありますか？】

［自由記述のため割愛］

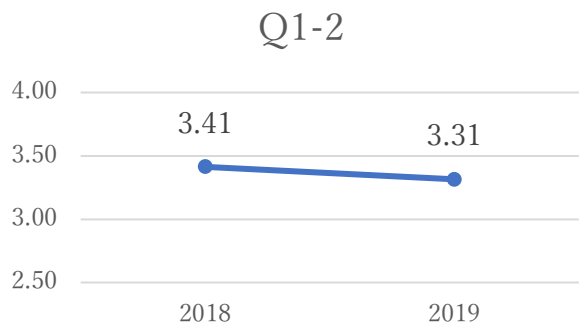
■ ２年生の結果

【 I. 実習について質問します。】

1）実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか？



2）実習の指導体制は適切でしたか？



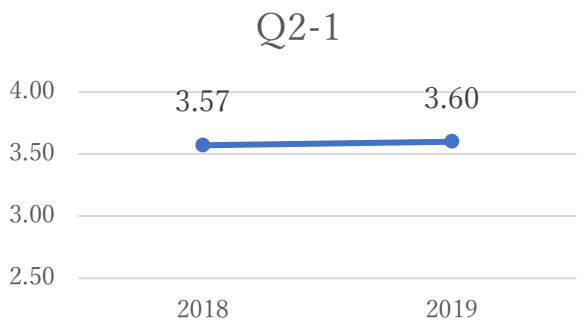
3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

［自由記述のため割愛］

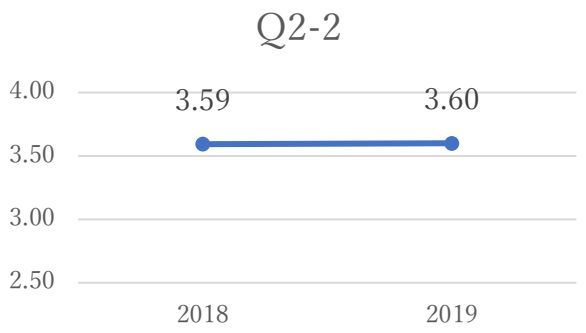
【 II. 授業について質問します。】

※「教職課題研究 II」以外

1）授業はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか？



2）授業の指導体制は適切でしたか？

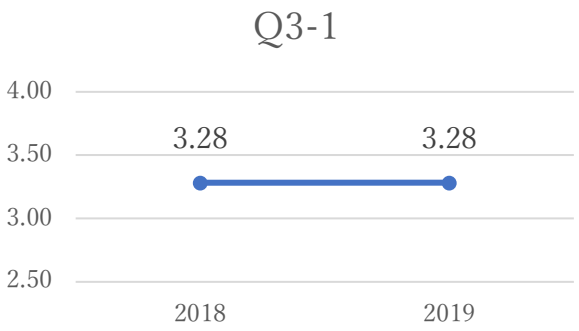


3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

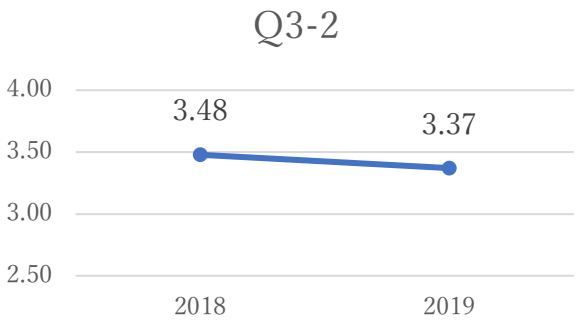
［自由記述のため割愛］

【 Ⅲ.「教職課題研究Ⅱ」について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？



2）教員の指導体制は適切でしたか？



3）この授業では訪問授業や大学での授業を行っていますが、満足している点と改善してほしい点はありますか？　［自由記述のため割愛］

4）その他で、満足している点と改善してほしい点はありますか？　［自由記述のため割愛］

【 Ⅳ. 実習以外および授業以外での教員の対応について】

1）実習以外および授業以外での教員の対応について要望はありますか？

［自由記述のため割愛］

以上

４．ＦＤ座談会

（１）期日
平成３１年２月２１日（木）１６：１０～１７：４０

（２）会場
管理・理系棟１階　仮ＰＬＣルーム（３０２号教室）

（３）プログラム
①開会の言葉
②アンケート結果の説明
③アンケート結果の対応策
④意見交換
・授業について
・実習について
・学生生活・環境設備について
⑤総括

（４）意見交換の概要
①授業について
・組織マネジメントを学べたことは大きな収穫だった。
・学びを残すためには宿題も必要だと、改めて感じた。たいへんだったが、講義を自分のものにするためには、文字化するのは有意義だった。
・教科指導能力も高めたいと思っている現職教員も多い。現職教員も高度化実践実習Ｉ等のなかで、ストレートマスターと同様に授業をしてもよいのではないかと思う。
・［ストレートマスター１年生から］教科指導力を高める授業がもう少しあってもよいのでは。　→［ストレートマスター２年生から］個々人で深めたり、空き時間を使って各先生に教科教育のことを尋ねる方法もあるのでは。
・［教員から］教科指導教育に係る学部の授業を受けたいという要望はあるか。　→［ストレートマスター１年生から］受けたい。［２年生から］既にそれをしている院生もいる。

②実習について
◆高度化実践実習Ｉ
・先に実習の予定を入れたら、他の実習や行事と重なってしまった。早めに情報がほしい。　→［教員から］日程等の情報の伝え方については、検討したい。
◆重点領域実習Ｉ
・楽しく充実した実習になった。
・自らの反省としては、目的がはっきりしないで臨んだような気がする。どこに焦点をあててよいか、ぶれてしまった。
・事前に、自分が出掛ける実習先に関係する選択科目を教えてもらったので、よかった。
・実習校の状況（単式・複式）を早めに把握できればもっとよかった。→　［教員から］今回は日程等の課題もあったが、実習校との打ち合わせや事前指導を深めておくべきだった。

・ICT を通した授業の難しさがよく分かった。実際に会って学ぶ喜びも体験だと感じた。でも、実習先に迷惑が掛かったのかも…。
・実習先とは、今でも交流が続いてうれしい。その一方で、いろいろな準備や連絡も必要だった。
◆開発実践実習Ⅰ
・実習先から、私たち院生に大きな期待があり、それに応えられない面もあった。→ ［教員から］実習校と充分に事前打ち合わせをしたい。
◆実習全般
・実習後の省察によって、今まで見えなかった観点が見えるようになった。
・［教員から］ICT を用いた授業デザインについての知見は、現代の教育には必須。web 会議等、実習後の教育実践で活用してほしい。

③学生生活・環境設備について
・来年度２年生の院生室座席の確保の見込みは？　→ ［教員から］管理・理系棟改修工事が大幅に遅れており、キャンパス内の教室が不足しているなか、今年度以上に難しい。申し訳ないが、図書館の自習用デスクや自習用個室、討論室もあるので、そちらも活用してほしい。この部屋（仮ＰＬＣルーム）も授業時以外は自習利用可能なので、使ってほしい。　［現職２年生から］自分自身も図書館やＰＬＣで自習している。
・院生室に掃除用具をほしい。→ ［教員から］購入して配置することにする。
・［教員から］オフィスアワーも積極的に活用してほしい。
・［教員から］今年度のＦＤ座談会は、全員ではないけれども現職・ストマス両方の２年生も参加できてよかった。

５．授業リフレクション

教員間の授業リフレクションに用いた「授業リフレクションシート」（各科目）を、次ページ以降に示した。

講義名	学校を基盤とするカリキュラム開発（必修）	2019 年度第【Ｔ２】開講	
担当者	廣瀬・奥山・竹下・古園	みなしの有無	有

目標（シラバス）		主な評価方法
共	カリキュラム開発等の諸理論や、その意義、要点を理解できる	・理論に基づいた事例の整理・分析を行い、その結果を報告資料としてまとめた。
現	事例を整理し、その多様性や特徴を理解・分析できる	
新	教育課程の具体的な要点や手続きを理解し、その開発力量を高める	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
カリキュラムに関する諸概念の理解を活動と講義形式で、カリキュラム開発に関する研究知見（カリキュラム・リーダーシップ）の獲得を文献読解で行った。その後、理論を視点に事例（自校や他校）を分析し、その特徴を確認した【最終課題】。みなし教員に各校のカリキュラムマネジメントについて紹介してもらい事例的な知識の獲得をはかった。	・理論的な枠組みを用いて事例を分析した。理論と実践の往還にかかる導入学習と位置づけた。理論の理解深化と学校の特色理解の深化とが進んだ ・ストマスはインタビューを理論的枠組みに即して行うなど、先輩の取組みが財産となり始めている	・活動場所を多様に認めることで、相談したい人、静に活動したい人といったニーズに応えた ・整理分析の時間を講義内で確保することで、活動を通して理論への理解を個別に深められるようにした ・みなし教員の先生と打合せを行い、当日の活動計画について検討した

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・）

カリキュラムマネジメントという国の動向もあってか、院生のカリキュラムに対する理解欲は高まっていると感じた。最終課題の難易度が高いなかで、院生が粘り強く取り組んでくれた。3 年間を振り返ると、難しいながらも毎年、受講生はレポート提出に至っているため、やはり達成可能な課題であると感じた。ストマスについては、高度化の実習校や知り合いの学校関係者に、理論的な枠組みをもとにした質問項目をもとに、インタビューを行う院生が増えてきた。高度化Ｉの組織的な業務に関する学習と連動しながら進めることで、学びが深まる様子がうかがえた。次年度は、この点をガイダンスで伝えたい。

※参観者の意見・感想等

新たな学びのスタイルを展開している事例として、福井県や新潟県の学校を取り上げてわかりやすく説明されていた．特に、主体的・対話的な学びが展開されている様子がよくわかった

大学院生それぞれが、自己の課題に対して調査・分析したことをグループで協議するための準備を進めていた．学生の主体的な学びを配慮してあり、参考になった

改善計画	
実践レベル	毎年反省に書いているが、TT の組み方や動き方について確認したり、互いの専門性を発揮できるような活動内容を計画したりしないといけない。
シラバスレベル	特になし。ただし、みなし教員に講義を担っていただいたが、呼べる時期によって、授業内容を前後に入れ替えるといった修正が、その都度、必要になる。
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（特になし　　）

講義名	特色ある教育課程とそのデザイン（必修）	2019 年度第【Ｔ４】開講	
担当者	廣瀬、山本、奥山、上仮屋、鎌田、中原	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	特色あるカリキュラムの意義、要点、そのデザイン方法を理解できる	生産物（学習成果のレポート）
現	カリキュラム（単元レベル）を事例や理論を活用してデザイン・修正できる	
新	カリキュラム（複数学年・教科横断的）を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
特色ある教育課程について､理論や事例の収集及びデザインを行う。特別支援、ICT 等、いくつかのトピックに分けて、多様なニーズや社会的･地域的背景及び特色を踏まえた授業やカリキュラムのデザインや修正に取り組みつつ､教育課程の全体像を構築・批評する力量を培う。	・扱ったトピックについて、自己の関心や探究課題との関係性を確認しつつ最終課題に取り組めていた ･2 年次の実習に向けて勤務校の課題を解決するための学習機会としていた	・今年度も附属特別支援学校にて座談会やパネルディスカッションを行い、理解深化を図った ・プログラミング教育等、体験を通してその意義を理解する取組みを行った

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・）
現職院生の生産物を見ると、各自が今年度の様々な学びを整理しつつ、次年度の実習や課題探究に向けた学習を進めており、年度末の必修科目として本科目が位置づいている利点を理解しつつ、受講できていたように思う。学校の状況を教育課程などから整理・分析し、次年度の改善計画を構想している院生もいた。ストマスが、高度化実践実習Ｉでの学びを振り返り、参考文献を紐解きながら、理論的な枠組みで自己の探究状況を振り返ることができていた点は、褒めてあげたい。このように、本講義の目的に迫る院生の姿が見られたので、次年度も、展開は変えずに進めたい。

改善計画	
実践レベル	個人の探究活動と班別活動の組み合わせ方（数が増えるので..）
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 【変更内容　　】 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 【変更内容　　】 ③その他（特になし　　）
主なテキスト	適宜配布した
前年度からの改善点	特になし

講義名	授業研究の実践と課題（必修）	2019 年度第 3T 開講	
担当者	溝口・假屋園・原田・山本・山元・髙味・山内・中原	みなしの有無	有

目標（シラバス）		主な評価方法
共	教科の特性や学級形態、児童・生徒の実態に即した授業の観察・分析を的確に行うとともに、授業研究会の趣旨や進行方法を理解して、討議の中心課題をふまえた授業改善のための議論を行うことができる。	模擬授業、授業検討会の成果、及びこれらの企画・運営への参画状況
現	授業の観察・分析を緻密に行うとともに、授業研究会における議論を的確に整理し、討議を円滑に進めるファシリテーターとしての役割を果たすことができる。	
新	変更なし	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
授業研究会に参加したり、会を実施・企画したりした経験から授業研究の課題を抽出し、その克服に向けて「初任者の教科指導力向上を兼ねた、学校の研究テーマに関する授業研究を組織する」という課題に取り組んだ。授業観察・分析の方法や授業研究会の組織の仕方について協働で探究することをねらいとした。	・持続可能性を意識した授業研究の在り方について、様々なアイディアや企画を考えることを通して追究できていた。 ・学校研究・組織経営分野を希望する学生の積極的な係りが見られた。	・第 1 回の授業において本授業の最終課題のと昨年度の院生の課題に対する成果物の提示を行うことで、授業の目標と評価について具体的なイメージを持たせるようにした。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・）

昨年同様、「授業研究の企画・実施・省察」のサイクルを意識した授業計画とした。2 コマ連続の授業であるため、前半 90 分は院生の各班が授業研究会（模擬授業＋授業研究）を企画・実施する時間、後半 90 分は前半の授業研究会についてワールドカフェ方式で省察する構成とした。学生を 2 班に分け、各班には連続する 2 回の授業研究会を企画するよう求めた。企画・運営のみの評価では、授業提供者とその他の学生で作業負担の個人差が出るため、個人で作成する「最終課題：授業研究会の Tips 集」をもって評価対象とした。課題としては、以下が挙げられる。

・受講生が少なく、模擬授業での児童・生徒役や参観者・観察者の役を割り振るのが難しい。
・実際の授業ではないため、その後の授業研究での議論が抽象的になる傾向がある。
・学生企画であるため担当教員の専門性とは異なる教科の授業研究となってしまう場合もある。
・教科指導力の向上という点での、学生の議論の掘り下げ方が不十分である。

改善計画（案）	
実践レベル	授業研究を行う場の設定を検討する（学校の授業参観や VTR 視聴など）
シラバスレベル	みなし教員（附属小・附属中）には 1 回ずつ、授業内で勤務校の授業研究について講話をして頂いた。可能であれば複数回の招聘を考えたい。
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（特になし　）

講義名	教材研究、指導方法、評価に関する 実践的課題とその改善（必修）	2019 年度【T1-2】開講	
担当者	溝口・假屋園・原田・山本・ 髙味・山元・上仮屋・	みなしの有無	有

目標（シラバス）		主な評価方法
共	教材研究、指導方法、評価の側面から、教科の授業設計に関する自己課題を明確化できる。/ 多様な児童生徒に有効な教材の開発、指導や評価の方法について説明することができる。	課題資料に関するレポート、授業後の省察レポート、単元の授業計画構想のポスター発表を総合して評価した。
現	教科の授業設計に関する自己課題を明確化するとともに、課題解決に向けた見通しを立てることができる。/ 教材の開発、指導や評価の方法を検討し、学校での授業改善に資する取り組み（授業改善方法）を提案できる。	
新	変更なし	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
教科の授業設計に関する受講生の実践上の課題を明らかにし、課題の解決策として、主体的・対話的で深い学び、特別支援、ICT 活用、小中一貫教育などの視点から、多様な発達段階や環境にある児童生徒に有効な教材や指導方法を協働的に探究した。具体的には、文献調査の成果を踏まえた、単元の指導計画を作成するとともに、その意図を説明するポスターを作成し発表を行った。	・学卒院生は単元全体を設計する経験が初めての者も多く、自己の実践課題と単元設計とのつながりを捉えることが難しいようだった。 ・視点が多様である分、個々の視点を活かした教材・指導方法を深める点では課題も残った。	・４月当初から manaba を活用し、学習支援システムを用いた学習を展開した。 ・小中一貫教育を主題とする授業では、開発実践実習Ｉの小中一貫チームの院生の学びと連動させた学習を組織した。 ・文献の調査に係る講義と、各自の調査の結果を発表する機会を設けた。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

（主担当より）

今年度は、時間割を水曜６限から火曜２限に移したこともあり、院生も余裕をもって取り組めていたようであった。授業の変更点は、文献調査や研究の方法について講義と簡単な演習を行い、各自で関心のある文献について調べ、発表する機会を２回設けた点である。これにより、学術的な文献資料等を踏まえた、指導計画の作成に意識的に取り組めたようだった。今後は、教職課題研究Ｉでの文献調査法とも連動させ、より学術研究を意識した学習が行えるようにしたい。

院生の様子としては、学習指導要領で求められている資質・能力の育成と単元で達成すべき授業の目標を関連付けて、指導計画に反映させようとする様子が見られた。ただ、扱う視点が多岐にわたるため、個々の視点・テーマを関連づけ、統合することは院生に委ねる結果となり、やや消化不良である点は昨年同様の課題として残った。

（今後の課題）
　改組後の教科・領域における選択科目群の充実に伴い、本授業とそれらの科目群との関連性や接続の検討が必要。

改善計画	
実践レベル	講義全体の計画については今年度を踏襲したい。評価の観点などについては、改めて検討したい。
シラバスレベル	特になし。みなし教員（特別支援学校）に講義を担って頂いているが、招聘時期により、授業計画の修正が、その都度、必要になる。
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（特になし　　）
主なテキスト	適宜配布した。 著作権の問題もあり、紙媒体での配布が必要とされる。
前年度からの改善点	文献調査や研究の方法について講義と簡単な演習を行い、各自で関心のある教科・領域等の学術的な文献を調べ、発表する機会を 2 回設けた。

講義名	学校における生徒指導の実践と課題（必修）	2019 年度【Ｔ４】開講	
担当者	関山 徹・今林俊一・假屋園昭彦・ 塚元宏雄・鎌田志穂	みなしの有無	有

目標（シラバス）		主な評価方法
共		学習態度、授業内における討議等での貢献度、テーマごとの小レポートの３つを総合的に評価した。
現	理論的枠組みと対照しながら自らの実践を省察するとともに、コーディネーターとして組織的対応を実践できる	
新	生徒指導の具体的課題について理論と関連づけながら理解するとともに、それを組織の一員として実践できる	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
積極的生徒指導のあり方とその展開方略について理解を深めるとともに、児童期・思春期の発達や道徳、ユニバーサルデザイン（ＵＤ）との相互関係についても探究した。また、さまざまな仮想事例を取り上げて討議を行い、多面的な児童生徒理解と多層的な関わりをどのように組織的に実践できるかについて検討した。	新卒院生は多面的に子どもを理解し開発的・予防的に関わる必要性を、現職院生はチーム支援を年間の見通しをもって行うことの意義やＵＤの日常的営みの大切さについて改めて実感したようであった。	最終日（4 コマ）では、まとめとして「不登校の未然防止のためのグランドデザインと年間計画」という観点からプラン作成と討議を行った。生徒指導を学校全体の年間的営みとして捉え直すよう目指した。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

・みなし専任教員とも打ち合わせを重ね、ＵＤの回では褒め方・叱り方の具体を追加でき、まとめの最終４回では学校楽しぃーとの活用にとどまらぬ広い視野からの授業を展開することができた。

・例年に比べて、受講生が他の回で得た知見をそれ以降の回に活かして議論する姿が少なかった点は、やや気に掛かった。

※共同担当者のプチ・リフレクション…

・褒め方・叱り方などのリクエストしていただいたので、いつもとは少し違う対象、内容で、私自身、大変勉強になりました。

※参観者の意見・感想等…なし

改善計画	
実践レベル	みなし専任教員との打ち合わせをさらに早期から行う。
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・なし ②曜日や時間の変更の有無・・・なし ③その他（　なし　　）
主なテキスト	特になし
前年度からの改善点	仮想事例の検討では、図式化して状況を整理する方法を強調したところ、例年よりも理解の円滑化や多角的な見方が全体的に増した。

講義名	教育相談の方法と実践（必修）	2019 年度【Ｔ４】開講	
担当者	関山 徹・有倉巳幸・塚元宏雄・鎌田志穂	みなしの有無	有

目標（シラバス）		主な評価方法
現	支援チームを組織して具体的課題の解決にあたるとともに、学校全体としての教育相談を計画・運営できる	学習態度、授業内における討議等での貢献度、レポートの３つを総合的に評価した。
新	教育相談で求められる共感的な関わり方を理解するとともに、それを支援チームの一員として具体的課題の中で実践できる	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
児童生徒の理解や支援について具体的に取り上げると共に、仮想事例のグループ討議やロールプレイ等を通じて、学びを深めた。また、児童生徒だけでなく保護者や教員集団の困り感や状況を理解した上でのチーム支援の方略づくりや年間計画を構想した。	現職院生は授業で得た知見を在籍校でどのように具現化するかについて真摯に考えていた。学卒院生は、教育相談の組織的側面の重要性に気づいた一方、欠席する者がやや多かった。	県総合教育センター調査研究発表会に参加することで、他校の現職教員と共に事例検討に取り組む機会を今回も設けた。特に学卒院生には、現場の実情に触れながら考える場になった。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

・前回のリフレクションを踏まえて、開発実践実習Ｉにおける教育支援センターでの体験（不登校生や指導員との関わり）を思い出させながら、授業を進めた。昨年度よりは実践面との連結性が向上したのではないだろうか。

・再登校支援チームの具体的運用の仕方や教育相談コーディネーターに関する内容について、もっと触れたかったが、全体のバランスを考えるとそこまでの時間的余裕がなかった。

※共同担当者のプチ・リフレクション

いじめの内容については、ロールプレイや基礎的方法を深めた。また、討議では、多様な意見が出にくい傾向はあった。年度ごとの状況にあわせた工夫が必要だと感じた。

※参観者の意見・感想等…なし

改善計画	
実践レベル	授業の基本的内容は決めてあったものの、みなし実務家専任教員との細部の打ち合わせが直前になってしまった。次回からは早めに実施したい。また、多様な意見がでるようなグループ分けの仕方を工夫したい。
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・なし ②曜日や時間の変更の有無・・・なし ③その他（　なし　　）
主なテキスト	特になし
前年度からの改善点	実習場面とのつながりを意識させて、単なる知識・方法論の取得に終わらないように留意した。

講義名	学級経営の実践と課題（必修）	2019 年度【T1-2】開講	
担当者	有倉・山口・迫田・中原（附小）・山内（附中）・上仮屋（附特）・佐藤（附特）・塚元（センター）・鎌田（センター）	みなしの有無	有

目標（シラバス）		主な評価方法
共	学級経営の目標や計画、課題について、受講者の作成した学級経営案や様々な実践事例を検討しながら、学級経営に関する実践力を身につける。	毎回のショートレポート及び授業での成果物や活動の参加状況の観察
現	これまでの自らの学級経営を客観的に分析し課題を整理するとともに、効果的な改善策を立案できる。	
新	ユニバーサルデザインに基づく学級経営の基本と課題について理解を深めることができる。	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
学級経営に関する理論的な知見を紹介し、小学校、中学校の順に学級経営案作成と発表を行った。また、事例研究（インシデントプロセス法）は、小学校事例、中学校事例、保護者対応事例について現職教員学生から出してもらい、グループに分かれて検討した。	学級経営案づくりについては、これまでの蓄積をもとに説明したので戸惑う様子はなかった。学部新卒学生の欠席が目立った。	・インシデントプロセス法に習熟してもらうために、4 回実施した。 ・プレゼンの経験をしてもらうために、学級経営案の発表は、小学校案はポスターで、中学校案は模擬学級 PTA 場面でパワーポイントにより実施した。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

３年目であるが、これまでの蓄積もあり、うまく進められたと思う。昨年度から私が全体の進行をすべて行うのではなく、小学校の学級経営案作成は山口先生、中学校の学級経営案作成は迫田先生が主となって進めてもらってるが、それぞれの先生の持ち味が活かされている。今年度は、みなし専任の先生方の都合がすべてついたので、小学校の学級経営案には中原先生、中学校の学級経営案には山内先生、インシデントプロセスを用いた事例研究には、附特の上仮屋先生、佐藤先生、センターの塚元先生、鎌田先生に参加してもらい、附属の学級経営の特徴を説明してもらったり、事例研究後のコメントをもらったりすることができた。前者については、参観された教職大学院のスタッフから、学級経営案作成後に附属学校の実践を知ることで、更に学びが深まっている印象をもったという意見を得た。

インシデントプロセス法については、今年度も学校現場で使えるくらい習熟してもらうために複数回行った。その効果は、県総合教育センターで行われる事例研究会で、教職大学院の学生が職員グループに入ってリードしている様子からもうかがえた。

参観者による意見・感想

７月中旬の学部教員による授業参観期間では、音楽科教員２名から参観頂いた。彼らからは、現職教員、ストレートマスターが共同で取り組むグループ学習の様子や、現場の実態に即した学習と

発表の様子を参観でき学生主体の講義のあり方の参考になった、附属教員による指導助言の様子やその内容も参考になった、という意見を頂いた。一方で、各グループの発表内容や附属教員からの指導内容を受けて、受講生間での突っ込んだ意見交換、改善点の指摘やそれに対する反論の時間を設けられれば更に良いとのことであった。現場での研究発表会や研修会でよくある「がんばってますね」、「参考になります」といった予定調和に終始したコメントをなくし、丁々発止やり合うべきだとの指摘を得た。（学校）現場ではない、大学という場だからこそ、できるものだと考えるからであるとのことで、こうした意見を参考にして、教職大学院から発信できる授業方法を検討したい。

改善計画	
実践レベル	デザインシートを作成し、山口先生、迫田先生にも作成してもらったが、事前の打合せが十分とは言えなかった。また、みなし実務家の先生方にはコメントをもらうだけにとどまった。これらの課題については毎年、改善できていない。また、インシデントプロセスにおいて、質問時間が予定より長くかかってしまうところがあり、的確な質問をする能力を身に付けさせるレクチャーが必要かなと思われる。 　学部新卒学生の学級経営案作成力、プレゼン力を高めるために現職教員学生はメンター役としてかかわらせる工夫も必要である。 　現職教員学生が２年次に学級担任となった場合は、その学級経営案を提出させ、学びがどのように活かされているか確認する取り組みも検討したい。 　学部教員から指摘があったように、スタッフのコメントの後に、学生による意見交換を追加できるようにしたい。
シラバスレベル	前期は木曜 2 限がないこともあり、毎回 90 分ではなく、4 回は 2 コマ続きで行った。学級経営案の作成や県総合教育センターから来てもらう上ではよかったように思うので、今後もこうした形で進めていきたい。
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　回によって、2 限連続で実施　　）
主なテキスト	蓮尾直美・安藤知子　2013　学級の社会学　ナカニシヤ出版 スクールプランニング制作委員会×学級づくり研究会編　2016　学級経営計画ノート　学事出版 白井利明　2001　図解　よくわかる学級づくりの心理学　学事出版 白松　賢　2017　学級経営の教科書　東洋館出版社
前年度からの改善点	特になし

講義名	自律的学校経営の理論と実践（必修）	2019 年度【Ｔ１】開講	
担当者	高谷、海江田、山口、迫田、（原之園）	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共通	1　公教育および学校教育が現在直面している種々の課題についてその特徴を把握する。 2　他者と協働しながら探究を進めていく力と対話をファシリテートしていく技術を獲得する。	○講義ポートフォリオとしての記録シート（予習・演習課題・レポート課題等の充実度）60 点 ○授業内におけるファシリテート並びに討議等での貢献度 40 点
現職	1　これからの学校に求められるマネジメントの手法や先行事例にみられる成功要因を理解する。 2　自律的学校経営に求められる管理職ならびに教員の力量について、その中身と育成方法を論じることのできる専門的見識を獲得する。	
新卒	1　公教育の果たす役割と自律的学校経営に求められる要件を理解する。 2　学校組織の特質と自律的学校経営の実現において求められる教員の役割について理解する。	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
テキスト「学校を変える新しい力」に加えてそれぞれの回に関連のある参考資料を読み、その中で生まれた問いを中心としたグループ討議を通して学校経営に関する理解を深める。 学生が２名１グループでファシリテート役を務めて授業を進める回と教員側が進める回を設定する。グループ討議には教員も必ず参加し、討議の質が高まるよう必要に応じて問題の投げかけ、助言を行う。	学校経営とは関係があまりないとの認識を示していた学生が、講義の回数を経るごとに共有ビジョンの必要性、リーダーシップのあり方、学校経営への参画やウェブ型組織などについて関心を深めている様子が、ファシリテート役を務める中で、或いはグループ討議の中で見受けられるようになっていった。	授業終了後の水曜３限に毎回、教員によるリフレクションを行い、院生の学びの深まりや授業展開の工夫、教員スタッフのかかわり方などについて振り返りを行った。 理解が不十分と感じられた時は、教員が積極的に介入するように努めた。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

学校改善の主役は教職員自身であり、各学校の実情に応じて理論を実践に移す努力を行う必要があるという認識は深まっていったが、ややもするとテキストや資料に紹介されている事例はどこか自分たちとは少し遠い所で起こったものという理解で終わる傾向もあった。そのために、ファシリテート役の院生への計画段階での助言、グループ討議や授業終盤における教員スタッフの助言やコメントが重要になってくる。本年度の授業においては、院生の学びの軌道修正という意味も含めて介入した場面が何度かあったが、教員スタッフがそうした取り組みの効果について意見交換できたことはよかった。

毎回、授業後にリフレクションを行ったことで、院生の学びの状況について確認でき、次回必要となる資料や教員スタッフのかかわり方について準備を行うことができた。

※共同担当者のプチ・リフレクション

この講義は、校長経験のある実務家教員も学校経営を理論的に見つめ直すよい機会となっている。授業後のリフレクションを行うことで、主担当教員の意図を理解しつつ院生の学びに即して授業をどのように改善していけばよいか、実務家教員としてのコメントとして何を準備すればよいか考えることができた。学校改善を図る上でシステム思考の観点から捉え直すことも大切であることが理解できた。

※参観者の意見・感想等

学部新卒学生が、現職教員院生の話やテキストの内容で、「分からない」と率直に質問することで、グループ討議が深まる場面があった。学校経営等馴染みの少ない領域に対して学部新卒学生が自分事として受け止め、主体的に学ぶようにする工夫が必要である。

改善計画	
実践レベル	受講者による学びのファシリテートについて、専門的なレクチャーや事前のサポートを実施する機会を創る
シラバスレベル	講義で扱う参考文献について、専門的な概念を学ぶことのできるものを準備し、中心的に扱う事項についても再考を行う
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　　無　　）
主なテキスト	浜田博文「学校を変える新しい力」小学館
前年度からの改善点	各回実施ごとに担当教員全員によるリフレクションを実施し、次時の授業展開に活かした。

講義名	学校教育の役割と教師の成長（必修）	2019 年度【T3-4】開講	
担当者	髙谷・原之園	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	学校教育が担っている社会的役割と教職の専門性についての見識を深め、教職に携わる者としての自己のあり方を省察し、今後の自己成長に係る機会を自ら創出することのできる力を身につける	・講義ポートフォリオとしての記録シート（予習・演習課題・レポート） ・授業内における論考や討議等での貢献度
現	教師集団全体の専門性向上に求められる要件を理解し、その方略について計画できるようになる	
新	教師としてのアイデンティティと力量形成の方途についての理解を深める	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
教職の専門性と教師の成長にみられる特徴について、最新の研究知見と事例に学び、学校教育の役割と教師の成長について専門的に考えることのできる見識を身につける。そこから、教師の成長はいかなる条件下で促されるのかについての理解を深め、教師の成長の舞台を自ら構想することのできる実践的力量の獲得を目指した。	テキスト文献に記述されている事例の具体的な場面を想像し教師の成長の特徴をとらえることができていた。その一方で、抽象的な論考や専門的な概念についての検討は難しいと思われる場面が多くみられた。	受講者が自分たちで論考し考察を深めていくことができるよう、教員側は問いを投げかける役割を重視した。また、そのために必要な支援やファシリテートに専念した。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

自分たちで問いをたて様々な視点から意見を出し合い論考や解釈を深めていくような、対話的な学びを自分たちで創る機会を多く提供したが、それを十分に活かした授業展開にはなりづらかった。テキスト文献の内容理解を個々に深めることは実現していたが、それを基盤に共に新たな知を生み出す水準にはほとんどの場合、至らなかった。ものごとを事例的に、経験的に、感覚的に理解することはできているが、それを専門的に、抽象的に、多角的にとらえる力の育成が必要だと感じた。

※共同担当者のプチ・リフレクション

授業構成・展開は魅力的であり、学生の知的関心を喚起し、魅了していた。残念ながら、受講生は自分の考えを深め、そして再構成して表現することが十分にはできなかったことがあった。今後、教職大学院の学修に当たっては基礎的な知的トレーニングとさらなる丁寧な指導が必要ではないかと感じた。

改善計画	
実践レベル	抽象的思考や論理的思考が習慣づく課題提示を増やす
シラバスレベル	教師の成長を個のレベルではなく社会的にとらえることのできる展開へと組み替える
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　　）
主なテキスト	グループ・ディダクティカ編（2012）『教師になること、教師であり続けること』勁草書房。
前年度からの改善点	実践を経験的に語るのではなく、専門的な知見に基づき論理的に分析しながら語ることができるよう問いや課題を設定した

講義名	鹿児島における学校教育と教員のあり方（必修）	2019 年度【集中】開講	
担当者	海江田修誠　原之園哲哉　鎌田志穂	みなしの有無	有

目標（シラバス）		主な評価方法
共	本県の特徴的な教育施策の内容を理解する 本県の教育課題の解決策について、ユニバーザルデザイン、ＩＣＴ、アクティブラーニング、少人数教育、小中一貫教育等の視点を踏まえながら考察し、適切に説明することができる	・ふりかえりシート、課題の記入状況 ・グループ討議等への参加・貢献度 ・施策提言の深まり・説得力
現	本県の教育力を底上げするためのファシリテーションができる	
新	本県の教育上の課題を分析し実践することができる	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
Ⅰ期（４～６月）で教育施策に触れさせるとともに、テーマを設定し意見交換 Ⅱ期（６～12 月）県立楠隼中高一貫校、県立高等特別支援学校の２校を訪問 Ⅲ期（12～１月）施策提言を作成し発表会を実施	昨年同様、１年間での成長の様子は見られた。施策提言としては、これまで２年間で出なかった高校入試やスポーツ振興などユニークなものもあったが、内容に深みのないものもあり、差が大きかった。	Ⅰ期目の当初で、学校現場ではなかなか考えられない教育行政からの視点を紹介して、発想を変えることの意義を強調した。この点がこの授業の意義だと考えるので、来年度も工夫していきたい。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

シラバスにグランドデザインを作成しプレゼン系形式で発表させるとあり、発表時期を第４タームに設定しているが、一方、教育行政の視点はできるだけ早く触れさせたいとの思いから第１タームから始めざるを得ないため、結果的に通年の授業になっている。

その間をⅡ期として学校訪問をしており、昨年度爆発を心配した桜島の学校訪問と、開発実践実習Ⅰとの重複を避けるため坊津学園訪問を止め、今年度は遠方の楠隼中高一貫校と訪問３回目となる県立高等特別支援学校の２校を訪問した。学生の反応はよかった。

この３期生で初めて、Ⅰ期の段階からストマスの欠席やレポートの未提出、現職生にもレポートの提出遅れ等があった。最後の施策提言は全員提出したが、全体的にストマスに関心を持たせることが難しかった。

改善計画	
実践レベル	
シラバスレベル	学校訪問にかわるメニューの検討（市町村教育長、県教委職員の講話など）
教務レベル	①　開講期の変更の有無・・・無 ②　曜日や時間の変更の有無・・・無 ③　その他（　　）
主なテキスト	鹿児島県教育振興基本計画　施策概要など
前年度からの改善点	学校訪問先の変更

講義名	学校教育におけるデータ分析とその活用（必修）	2019 年度【Ｔ１】開講	
担当者	有倉巳幸・假屋園昭彦・山本朋弘	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	教育データを適切に分析し、エビデンスとして用いることができる。また、目的に応じた計画を立て、調査及び資料収集をすることができる。	Manaba による Excel 課題及び、レポート課題でシラバスに記載した観点を評価
現		
新		

講義の概要	学習者の様子	工夫点
評価・改善に向けて、現状理解のための調査計画の立案、実践によって得られたデータをはじめ、公開されている様々な教育データの分析と読み取り、これらから得られた知見をどのように教育活動の改善につなげていくかを検討していく。	量的データ処理については Excel を使用するが、得手不得手がはっきりしている。また、今年度は manaba での課題提出が滞ることが多かった。	今年度は、個人情報等の管理に係る倫理的問題について初回に説明し、学校教育におけるデータの取り扱いの重要性を伝えることにした。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

３名で担当しているが、パソコンを使った演習は、主担当以外も院生の作業に関与するものの、質的研究については２回しか実施できなかった。フィールドワークが中心となるので、改組後はこの授業の時間数を見直し、教職課題研究Ⅰ、Ⅱと関連づけた授業にしていきたい。一応、最終回では、他の授業や探究課題で用いる「学校楽しぃーと」の見方、処理の仕方、仮想データから読み取れることについてグループで検討させることができた。

※共同担当者のプチ・リフレクション

假屋園：２回分の担当なので質的分析の理論的背景を説明するだけで終わった。理論的背景の説明は不可欠であるが，実際に分析を体験してもらうためにはもう少し回数が必要であろう。

※参観者の意見・感想等

特になし

改善計画	
実践レベル	令和３年度の改組の際に、2 単位 30 時間の演習にし、質的研究に係る時間を多くとる。
シラバスレベル	
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　　）

主なテキスト	特に設けていないが、参考図書として、下記の本を挙げた。 西内　啓　2013　統計学が最強の学問である　ダイヤモンド社 西山敏樹・鈴木亮子・大山幸周　2013　アカデミックスキルズ　データ収集・分析入門　社会を効果的に読み解く技法　慶應義塾大学出版会 関口靖弘　2013　教育研究のための質的研究法講座　北大路書房 谷岡一郎　2000　「社会調査」のウソ　リサーチリテラシーのすすめ　文春新書
前年度からの改善点	個人情報等の管理に係る倫理的問題について初回に概説したことと、鹿児島県総合教育センターが開発した「学校楽しぃーと」について仮想データを用いた検討を採り入れ、より実践的な内容にした。

講義名	学校安全と危機管理（選択）	2019 年度【Ｔ４】開講	
担当者	関山 徹・黒光貴峰	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共		学習態度、授業内における討議等での貢献度、レポートの３つを総合的に評価した。
現	学校安全と危機管理の基本的な知識と対処法を身につけるとともに、それを組織の一員として実践できる	
新	学校安全と危機管理について、組織の中核的な立場から準備・運営・改善ができる	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
防災教育のあり方とその実践例をとりあげて、鹿児島県における課題を検討した。さらに、学校災害時における心理ケアを組織的に行っていくための方略や保護者・地域との協働について学び、心の減災教育のための授業づくりを検討した。	災害時の安全確保や心理的ケアについての重要性に気づき、その際の集団心理や組織的対応のあり方について、これまでの認識や経験を振り返りながら熱心に討議する姿があった。	気象台職員を招いて、津波防災に関するワークショップ型の授業を行った。また、トラウマ反応の変遷のグラフの読み解きや奄美豪雨災害事例の検討、小学４年生向け心理教育用の授業案づくり等に取り組んだ。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

・今年度も一部の回で鹿児島気象台の職員を招くことができ、地域の実情に根ざした防災教育について具体的に学ぶ機会を確保でき、授業全体のバランスの上でも好ましいものとなった。

・前期開講授業「子どもと教師の心の健康マネジメント」の受講生が多かったためか、例年よりも平常時のストレスマネジメントと本授業における非常時の対応方略を結びつけた議論になることが多かった。今後は、さらに意図的に知見の関連性に気がつく働きかけができるよう留意したい。

共同担当者から

・事前に受講生の情報（学校種等）をいただいていたので、授業の計画等が行いやすかった。また、日程もこちらに合わせて組んでいただけたので差し支えなく授業が行えた（ただ、その反面、関山先生にはご迷惑をおかけしたかもしれません）。

・私が担当した授業での課題としては、ストレートマスターと現職教員の協働のバランスである。学校安全ということで、現在、教育現場で行っている危機管理や実際に感じている課題を現職教員の受講生ばかりに聞いていたので、今後は、ストレートマスターの受講生にも思考する場面や発言する機会を増やすように留意したい。

※参観者の意見・感想等

避難の仕方など、シミュレーションができるようなワークシートを用意し、主体的な学びができるように工夫されていた。グループ協議の班編制は３、４人グループで、人数的に話し合いやすい環境であった。

改善計画	
実践レベル	多様な発達段階や学校状況における心理教育の授業案づくりを試みたい。
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①　開講期の変更の有無・・・無 ②　曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　特になし　　）
主なテキスト	特になし（随時資料を配付）
前年度からの改善点	今後、移民が増加することに備えて、学校教育においても災害時の外国語対応や文化差について例年よりも強調する内容に改めた。

講義名	グループダイナミックスからみた学級経営	2019 年度【Ｔ３】開講	
担当者	有倉巳幸・中原大士（附属小）・竹下洋一（附属中）	みなしの有無	有

目標（シラバス）		主な評価方法
共		Manaba によるリフレクション（毎回）及び、終講レポート課題
現	・これまでの学級経営をグループダイナミックスの知見から省察した上で、改善プランを提案できる	
新	・学級経営に関して、グループダイナミックスの知見から省察できる	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
グループダイナミックスの知見は、同調行動及び、学級集団の状態に合わせて取り入れる教師のリーダーシップ、学級雰囲気や集団規範の形成過程など、様々な角度から学級集団を理解することが可能になる。本授業の目的は、このようなグループダイナミックスの知見を踏まえて、学級集団の様相を理解し、検討することである。	ストレートマスターの無断欠席が多かった。授業外では manaba で毎回、リフレクションを提出させるが、提出が滞っていた（最終的には全員提出）。	集団間関係（黒い羊効果）を新たに紹介するなど、昨年度よりも、グループダイナミックスの理論的な知見を多くした。 みなし実務家教員の両名には、後半の５コマ分に参加してもらい、グループダイナミックスに関連した取組の紹介をしてもらった。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

グループダイナミックスの知見は、現職教員学生、学部新卒学生ともに興味深いようで、学校現場でみられる様々な行動や集団現象がなぜ起こるのか、納得が得られたようであった。Manaba による毎回のリフレクションも、提出が滞る学生もいたものの、何人かはすぐに、しかも、かなりの分量のレポートをしてくれていた。授業を通して深まった知見が、2 年目の探究活動に活かされるとよいと思う。また、附属学校の実践紹介も学生が理論的根拠をもてたようで、自身の今後の実践につながるとよいなと思えた。

※参観者の意見・感想等…なし

改善計画	
実践レベル	グループに分けてディスカッションやその結果のプレゼンを行っているが、グループによる話し合いの質を向上させるために、受講生が多い場合でも、授業者の方からテーマを投げかけ、全体でディスカッションする機会を作ってみたい。
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　　）
主なテキスト	初回に、グループダイナミックスの定義や意義を理解してもらうために、『人間理解のグループダイナミックス（吉田道雄著）ナカニシヤ出版，2001』の 1，2 章をコピーして講読した。
前年度からの改善点	みなし実務家教員の関わり方（ディスカッションのときに、１メンバーとして特定のグループに入ってもらった）

講義名	学校づくりと教師	2019 年度【T1-2】開講	
担当者	髙谷	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	学校づくりの本質を理解するとともに、教職の使命を認識し学校づくりに積極的に取り組むことのできる実践的・専門的力量を身につける	・講義ポートフォリオとしての記録シート（予習・演習課題・レポート） ・授業内の演習や討議等への貢献度
現	・学校づくりの中核を担う者に求められる専門性・力を理解する。 ・主体間の協働をマネジメントすることのできる力を獲得する。	
新	・学校教育の果たしている機能に関する理解を深める。 ・学校づくりにおいて自身が果たすべき役割を明確化する。	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
公教育の役割とそこで学校教員の果たす役割について考える。学校というシステムが社会において果たしている機能とそこに潜在している問題について理解を深め、学力保障、人格の形成、社会化を核とした学校教育の果たしている機能の視点から教師に求められる役割と専門性について考察した。同時に、学校教育が必ずしも正しいものではなく、そこに潜む危険性についても気づくことのできる見識の獲得を目指した。	講義内の演習や対話、ディスカッションには、多くの受講生が積極的に参加し、自身の考えを率直に語り合うことができていた。また、これまで常識だと思っていたことを疑ったり、そこから新たなものごとのとらえ方を生み出したりつかみとったりする学習の深まりも多く見られた。	昨年度から授業内容をすべてリニューアルし、多くの学校教育の現場で当たり前だと思われていることが、いかに当たり前ではないかに気づいてもらうことを重視した。また、現実の困難や条件を理由に思考を停止させることの危険性を実感してもらうことにも力点を置いた。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

事前予習、講義内の演習・ディスカッション、事後考察など、受講者全員が非常に積極的に取り組んだ。ストレートマスターと現職教員の共同での学習では、ストレートマスターが若干遠慮して参加している様子が確認された。昨年度と 15 回の授業内容をすべてリニューアルして実施した結果、公教育の果たしている役割の理解、学校教育がはらんでいる危険性への着目、常識だと思い込んでいることがらの問い直しは、高度に実現した。学校教育のあり方を本質的に論考することのできる専門的な見識や感覚を多くの受講者がしっかりと獲得できたと思われる。

※参観者の意見・感想等

1. 日頃から「授業づくりと教師」に参加しているが、今回も数時間続けて検討している「なぜ学校は変わらないか？」というテーマで意見交換を行った。教師から見ると当然、または問題にしない、気にはなっているが検討してこなかったルール・校則などを題材に自分事として考える時間は、現職にとっては、耳の痛い内容であるが、一度立ち止まって考えたい内容である。

　ストレートマスターについても、不合理さを感じていたことなどを出し合える話が盛り上がる内容であるが、改善を図るとなるとどうすればよいか具体案はなかなか見つからない。

　児童生徒にとって学校はどういう場所であるか？教師サイドからの視点でなく検討している必要性を考えさせる授業である。

2. 資料（テーマに関する読み物）をさまざまに用意し、机の配置も小グループでの討議がしやすいよう、周到に準備されていた。討議を中心にした授業であったが、受講者の問題意識を刺激するような導入から始まり、議論が中だるみしないよう担当教員が途中で場面を再構成しながら展開させていた。まさに好奇心駆動型の授業であり、そのデザインの仕方は見習いたいと強く感じた。また、討議のやりとりはグループごとに録音されており、きちんと受講生の学びを把握しようとする担当教員の緻密さと熱意には感嘆させられた。

改善計画	
実践レベル	立場を越えた率直な意見交換・対話が実現するための支援を行う。
シラバスレベル	特になし。

教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　　）
主なテキスト	汐見稔幸（2000）『「教育」からの脱皮－21 世紀の教育・人間形成の構図－』ひとなる書房。 多田孝志編（2016）『教育の今とこれからを読み解く 57 の視点』教育出版。
前年度からの改善点	全 15 回の授業内容を、教育原理・教育方法学・教育社会学等の学問的知見を丁寧に学ぶ構成に大幅に変更した。

講義名	校内研修のデザインとマネジメント	2019 年度【集中】開講	
担当者	髙谷	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	校内研修の企画・運営に関する理論と実践について学び、教師の成長を支え促す校内研修を企画・運営することのできる実践的・専門的力量を身につける。	・授業内における演習・討議等への貢献度 ・講義全体を通した学びをふり返り意味づける最終レポート課題
現	教師の成長にみられる特徴と整合した校内研修を企画し、マネジメントすることのできる力を獲得する	
新	校内研修において求められる研究的考察力と対話力を獲得する	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
教師の実践的知識の特徴と、教師の成長にみられる特質から、教師の集団での学びの場に求められる要件を理解するとともに、そのような要件を満たした校内研修や学びの場はいかにデザインし実施することで実現するかを、学術的知見といくつかの事例を対象に実践的に学んでもらった。また、実際の研修機会へのフィールドワークやケーススタディの機会も提供し、それらを専門的な知見から意味づける演習も豊富に提供した。	これまで教職大学院で学んできた専門的な知見を、来年度学校現場に戻った際にどのように現場で実現していくかに問題意識を有している受講生が多かった。そのため、具体的に実現する方法に焦点化した講義内容への変更が、受講者の満足度につながった。	新型コロナウイルスへの対応のため、2 月から 3 月中中にかけて実施した集中講義後半は、受講者間の密なやりとりを中止し、専門的な知見と事例に深く触れ、個人的にしっかりと考えを深め表現する学習形態へと変更を行った。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）
集中講義としての実施のため、学習内容に応じて様々な学習形態での学習経験を提供することが可能となった。後半は新型コロナウイルスへの対応のため、ディスカッションやグループワークは行わずに実施したが、専門的な知見を受講者の問題関心に即して授業計画を変更して丁寧に提供し、具体的な実現事例をもとにしたケーススタディにしっかりと取り組んでもらうことで、校内研修や授業研究における教師の集団での学びの実現にむけて具体的にどのような挑戦に取り組んでいくかを明確化できた受講者が多かった。

改善計画	
実践レベル	実際に上質な集団での学びの場を経験する機会と、それを実現するための具体的な方法について発想できる思考力・想像力・創造力を鍛える機会を増やす。
シラバスレベル	そのときその状況に応じて変更や改変が可能な内容にしておく。
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　　）
主なテキスト	鹿毛雅治・藤本和久編著（2017）『「授業研究」を創る―教師が学びあう学校を実現するために―』教育出版。
前年度からの改善点	学習者の状況に応じて臨機応変に授業計画を変更できるようにしていた。

講義名	学校経営と組織マネジメント（必修）	2019 年度【Ｔ４】開講	
担当者	有倉、 （ゲストティーチャー：海江田、山口、原之園、 迫田、教職員支援機構特任フェロー）	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共		終講レポート課題
現	・組織マネジメントの考え方や進め方について基本的な理解を深める。 ・特色ある学校づくりや学校組織、教員集団をマネジメントできる力を身につける。	
新		

講義の概要	学習者の様子	工夫点
南九州プラットフォームと教職員支援機構との合同セミナーを活用した授業であり、第 2 回～第 13 回までは３日間の集中講義となっている。教職員支援機構から派遣される講師による授業と、オリエンテーション、セミナー後のリフレクションから構成されている。	受講対象者は現職教員学生のみ。熱心に受講していた。	合同セミナーを活用することで、カリキュラムマネジメントやアクティブラーニングの専門的な知見及びワークショップがふんだんに取り入れられている。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

今年度は、台風のため、開催が 12 月下旬となってしまい、最後の２回分については１月末に実施した。校長経験のあるスタッフ４名の学校経営論を語ってもらい、意見交換できた。１回目が８月１日に実施したが、２回目までにかなり間が空いてしまったため、１回目の意味づけが薄くなった。合同セミナー自体は、鹿児島県及び熊本県からも中堅クラスの先生方に参加してもらっていることもあり、大いに刺激になったと思われる。

※共同担当者のプチ・リフレクション…

学生は小中高の組織マネジメントを直接に聞けて有意義ではなかったかと感じました。ただ、校長経験者の講話時間がかぎられていたためか、少しばかり“経験則”による話に偏っていたことが気になりました。もう少し学校現場のマネジメントを抽象化、あるいは一般化して汎用性のあるものとすれば、さらに有意義なものとなったのではと反省しています（原之園）。

校長経験者の話をするということになり、学校経営について話すべきであったろうが、一人の教師がどのような教師生活を通して、見方・考え方を身に付けてきたかを話すこととした。これから長い教師生活を送る院生には少しでも役に立てばと思い、誕生から小・中・高・大学の振り返りから始めた。10 カ所の勤務地でのいろいろな経験を通して、感じたことや学んだことを紹介した。だらだらと自慢話になったみたいで申し訳なかった。個人的には、これまでを振り返り整理するよい時間をもらったが、授業の趣旨から大きく離れてしまったかもしれない。「学校経営にはこんなことが大切です」というような経験をしてこなかったので、「一小学校教師の 38 年」と題して語らせてもらった。次回は、

もう少し絞った話がいいと考えますが、学校経営は聞く側が何に興味を持っているかがわからないと焦点化するのが難しいなと思った。聞きたい事・知りたいことを出してもらって、その場でコメントする形でも面白いかもしれない（山口）。

※参観者の意見・感想等

最終２回の学校経営論の講義に参加したが、校長経験のある先生方が、どのような方針で経営され、またその中でどのような成果や苦労があったかなど、具体的に話してくださったため、現職教員院生にはとても参考になる内容であったと思う。校種によって、保護者の対応や生徒への接し方などが異なるため、ぜひ自身の今後のマネジメントの仕方について模索してほしいと期待する。

改善計画	
実践レベル	今年度のように台風で延期される場合には、もう一回、１回目の授業をやり直す必要があるかと思われる。 また、来年度は、合同セミナー自体が熊本大学教職大学院で開催され参加する学生が減る可能性が高いので、1 回目と 14，15 回目での内容を検討し直す必要がある。
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　　）
主なテキスト	特になし
前年度からの改善点	特になし

講義名	子どもと教師の心の健康マネジメント（選択）	2018 年度【T1-2】開講	
担当者	関山 徹	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	ストレスマネジメントの基本について理解し実践できるようになる	・授業内の討議における参画状況 ・期末レポート
現	ストレスマネジメントの基本を身につけるとともに、それを児童生徒との関係や自分自身の生活の中で実践できる	
新	ストレスマネシジメントを個々人の教育実践の中で行うだけでなく、それを同僚と共に展開できる	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
教師が自身と児童生徒の精神的健康を維持･増進するために必要な知見と対処法を身につけるために、ストレスの仕組みとそのマネジメントの仕方を学び、それを児童生徒との関わりや教師同士の関係の中で活かす方略について取組策を構想し、受講者同士で討議した。	自身のこれまでのありように思いをはせつつ、熱心に受講していた。また、社会的支援の重要性をよく理解して、それを活用する学校組織づくりについて各自の経験をもとに討議していた。	知的な理解に留まらないように、簡便な心理テストやリラクセーション法を体験しながら進めた。また、組織的な実践のための方策を全体で討議した上で、各自でレポートにまとめさせた。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

・序盤では、教師としてだけでなく、ひとりの人間としての感覚や子どもの目線から考えることを重視した演習を多く取り入れた。終盤では仮想事例の検討を行ったが、扱う事例数を増やしてより多面的な理解を促すようにしてもよかったかもしれない。

・組織経営分野や学校研究分野におけるトピックスとの関連（特に社会的支援と協働・同僚性の関係）を想起できるよう強調した。

※共同担当者のプチ・リフレクション…共同担当者なし

※参観者の意見・感想等…参観者なし

改善計画	
実践レベル	事例検討の件数を増やす代わりに、１つひとつの事例を短縮化する
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・なし 【変更内容　　】 ②曜日や時間の変更の有無・・・なし 【変更内容　　】 ③その他（　なし　　）
主なテキスト	特になし（随時、資料等を配付）
前年度からの改善点	今年度は理論的な側面との対応関係を明瞭化して、個別事例のなかだけの理解にとどまらないように展開や解説の仕方を工夫した。

講義名	授業研究の理論と実践（選択）	2019 年度【Ｔ１】開講	
担当者	廣瀬真琴	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	授業研究の意義や要点、そのデザイン方法を理解できる	・授業研のデザイン（生産物） ・運営の実際（観察）
現	授業研究の全体像（目的や意義、手続きやツールの活用法等といった運営レベル）を批評し、改善策を検討できる	
新	授業研究を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
授業研究に関連する様々な諸経験（教育実習や模擬授業、校内研修等含む）を共有し、自己の疑問点や、研究会として改善が必要な点を明確化していく。次いで、授業研究に関連する諸理論を習得することによって、授業研究の意義や多様性を把握し、自己の経験を相対化する視座を得る。講義内容を踏まえて、授業研究会を企画運営し、参加者の評価を得る。	・今年は、現職を中心として役割分担を行い、ミニグループ単位での熟議を丁寧に行っていた ・文献の内容についての質問を、授業研のデザインと関連付けて行う院生もおり、意欲的に取り組んでいた	・例年のように、最悪な授業研究の要点を逆転し、授業研究に求めたい基礎的な要件を導出させた。 ・その要件を実現するために個別の理論や事例の収集・学習をはかり、その成果を持ち寄るジグソー学習を展開した。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

授業研のデザインについて、「経験的にこうあるべき」という考えを、多様な資料を基に揺さぶることをねらった。デザインした授業研の実践後、招待した参加者のコメントなどをもとに、会の振り返りを行った。その際、自分たちの前提となっていたものや、文研で獲得した授業研の進め方との異同について言及する院生が出てきた。授業研のデザインと実践という経験を、理論的な側面から振り返ることの重要性を再確認できた。

改善計画	
実践レベル	やはり、授業研の実施後、デザインを修正する活動時間をもう少し取りたい。
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　特になし　）
主なテキスト	エリザベス・A・シティ他（2015）『教育における指導ラウンド:ハーバードのチャレンジ』風間書房（監訳：八尾坂修）
前年度からの改善点	昨年度は、個別に進められた理論の学習場面では、「こんなことときいてもいいのかなぁ」といった発言もあったので、1t という講義者と受講者の距離感を意識して、「質問タイムを個別に設ける」といった活動内容の再構成が必要であった。そのため、今年度は、質問を受け付けやすいように、個別に受けた質問を全体に共有するなどして、雰囲気作りに努めた。

講義名	学校研究の手法と実践（選択）	2019 年度【Ｔ４】開講	
担当者	山元、髙味	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	学校における各種教育活動の開発・評価の手法を身につける。	・講義ポートフォリオとしてのレポート ・講義内の演習や討議等での貢献度
現	基本となる学校研究の手法を理解する。	
新	自律的に教育活動の開発を進めるための実践研究手法と運営方法を身につける。	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
学校研究に関する専門書をテキストに、学術的な理論と具体的な実践事例の分析・考察を通して基本となる学校研究の手法を学ぶともに、附属中学校の全体実証授業の参画を通して、長期にわたる校内研究のデザインを試みる。	個々に高い水準で問いをもち、自身の考えを述べる積極的な参加がみられた。また、ファシリテーターとしての役割を認識しながら、テキストをもとに討議を深めるための工夫も見られた。学んでいる内容の実現可能性について、現実の厳しさを語る場面もあったが、前向きに取り組む意欲も見られた。	附属中学校の全体実証授業に参画（事前の打合せ、事前授業参観、当日の分担作業等）し、授業研究会の運営について考える機会をつくることができた。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

学校研究の現状から始まり、成立と充実の要件、テーマと推進体制、研究主任の役割、長期休業期間の取組、企画運営、成果の評価、研究発表会の開催と長期に渡る学校研究のデザインについて文献をもとに互いにファシリテーターを務めながら検討した。

担当としては関連する補足資料等を準備して情報提供に努めたが、実務家だけでは限界があるように感じた。また、１年間の校内研究をデザインすることを最終講義で求めたが、もう少し時間を確保し互いに検討、改善して充実したものにすべきであった。

※共同担当者のプチ・リフレクション

文献の内容と勤務校の実際を比較しながら改善の検討を試みる状況も見られ、来年度に向けた実践的な学びが展開できていたように思う。

※参観者の意見・感想等

無し

改善計画	
実践レベル	文献で紹介されている参考文献を入手できなかったため、テキストについても検討の余地がある。
シラバスレベル	研究家教員との協働授業としたい。
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　　）
主なテキスト	木原俊行（2006）『教師が磨き合う「学校研究」』ぎょうせい
前年度からの改善点	附属中学校における全体実証授業に参画し、校内研究の在り方について考察する機会を設定した。

講義名	総合的な学習のカリキュラム開発（選択）	2019 年度第【Ｔ３】開講	
担当者	廣瀬・奥山	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	総合的な学習の意義や要点、そのデザイン方法を理解できる。	生産物（総合的な学習のカリキュラム案）
現	カリキュラム（単元レベル）を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる。	
新	カリキュラム（複数学年・教科横断的）を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる。	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
総合的な学習のカリキュラム開発に関する理論や事例の収集及びデザインを行う。授業・単元＜学部新卒学生＞や、年間指導計画や全体計画など＜現職教員学生＞のデザインや修正に取り組み、総合的な学習のカリキュラムを構築・批評する力量を培う。	フィールドワークに自主的に取組んだり、カリキュラム開発に必要な点について議論を重ねたり、意欲的に学ぶ姿が見られた。	実際に桜島にフィールドワークに行き、総合的な学習の探究活動を体験しつつ、調査結果をもとにカリキュラム開発に取組む計画とした。また、参加者が一つの模擬的な学校に所属し、議論を重ねてカリキュラム開発に取組めるようにした。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・）
桜島を題材として取上げたり、模擬的な学校の同僚として活動チームを位置付けたことで、誰と、何について、なぜ議論するのかが明確になったように感じた。また、カリキュラム開発の前後で、同じ文献を繰り返し読解してもらったが、「1 回目は全然わからない」といっていた受講生が、「体験を通したことで、文章の理解ができた」と述べてくれたことは、うれしく思った。総合の探究サイクルを経験し、そのサイクルの意味を見出してくれたと信じたい。その一方で、初めての試みだったこともあり、活動の内容や時間設定等の見通しが甘かった。要反省である。

改善計画	
実践レベル	今年度の院生の様子を踏まえ、次年度の活動の枠組みや計画を見直したい
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 【変更内容　　】 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 【変更内容　　】 ③その他（特になし　　）
主なテキスト	田村学（2017）『平成 29 年版 小学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』明治図書出版
前年度からの改善点	実際にフィールドワークに行くなど、総合的な学習の模擬的体験を取り入れた。

講義名	ICT 活用と授業デザイン（選択）	2019 年度【Ｔ３】開講	
担当者	山本・下古立・山元	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	ICT 活用に関する授業デザインの実践的な手法を省察・習得する	実施した模擬授業の指導案，研修企画書，課題レポート
現	児童生徒が情報端末を活用した授業の実践的な指導力を身につける	
新	授業中に教師が ICT を活用して指導する実践的能力を身につける	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
児童生徒の情報端末活用を取り入れた模擬授業を実施し、ICT 活用に関する授業デザインの実践的な手法を省察・習得した。また、各教科等での具体的な活用場面を取り上げ、個別学習や協働学習での指導方法を考察・分析するようにした。	・各自で指導案や教材を作成して、模擬授業を実施することができた。 ・実際に ICT を活用した授業を参観し、実践的な手法を考察していた。	・発問や板書、ノート指導等の従来からの指導との関連を考慮した活用方法を探求するようにした。 ・毎時間の開始時に、デジタルポートフォリオへの入力を行い、前回の振り返りを行うようにした。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

院生が ICT を活用した模擬授業や研修提案を実施して、実践的な手法から授業デザインの重要性を学ぶことができた。従来の授業設計の考え方だけでなく、インストラクション・デザインの考え方を取り入れ、教育工学的なアプローチによる授業づくりの重要性に触れるようにした。特に、情報活用能力の育成として、プログラミング教育に関する教材を用いて、プログラミング的思考の育成を取り上げるようにした。実施した内容は、プレゼン等にまとめるようにして、授業の省察を各自で行うようにし、授業実施後の感想をまとめるようにした。特に、毎時間の開始時に、デジタルポートフォリオへの入力を行い、前回の振り返りを行うようにした。

※参観者の意見・感想等…特になし

改善計画	
実践レベル	ICT 環境が十分でない現任校の院生（現職教員）については、実習の授業と連動させて、タブレット端末等を大学から貸し出して次年度の実習や授業実施ができるように配慮する。
シラバスレベル	特になし。受講生の実態に応じて，タブレット端末活用だけでなく，プログラミング教育や情報モラル教育を取り上げるようにする。
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・有 【変更内容　後期から前期に変更し、必要なスキルを早く習得させる。】 ③その他（特になし　　）
主なテキスト	適宜資料を配付
前年度からの改善点	ICT 活用に関する研修の企画を授業の中で実施.

講義名	人口減少社会での ICT 活用の役割（選択）	2018 年度【Ｔ１】開講	
担当者	山本・下古立・山元	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	遠隔地での授業や研修における実践的指導方法を身につける	課題レポート 指導案
現	小規模校への学習支援での課題解決を探求することができる	
新	模擬授業を通して、対面と ICT を組み合わせた指導方法を習得する	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
人口減少社会での教育課題の解決に向けた ICT 活用として、テレビ会議や e ラーニングシステムを取り上げ、実際に遠隔授業を実践し、遠隔地での授業や研修における指導方法を省察・習得した。また、小規模校への学習支援での課題解決を探求し、遠隔授業での実践的指導方法を習得することができた。	・チームを編成して、テレビ会議システムを活用した遠隔授業を実践した。 ・離島実習に向けての準備や連絡調整としても遠隔システムを活用していた。	・チームを編成して遠隔授業の教科を決めて、指導案や教材作成の準備を協働で行うようにした。 ・三島小との遠隔授業を実践してもらい、実際の児童の様子を観察できるようにした。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）
受講者全員が参加して、離島（西之表村等）との遠隔授業を協働的に実践することができた。講話等で小規模校が抱える教育課題を理解し、徳之島町や高森町などの先進地域の学校とテレビ会議でつなぎ、小規模校で遠隔合同授業が必要であることに理解を深めることができた。日本科学未来館と接続して、専門施設との合同学習を体験させた。三島小学校との遠隔合同授業を実施したが、打ち合わせが困難であり、接続先を再検討するようにした。実施した授業は、ビデオカメラ等で撮影するようにし、授業の省察を各自で行うようにし、授業実施後の感想をまとめるようにした。新卒学生が授業を実施する場合には配慮が必要であると感じた。 **※参観者の意見・感想等**…特になし

改善計画	
実践レベル	三島小学校との遠隔合同授業について、前年度に調整を行い、計画的に実施できるようにする。また、院生による遠隔授業についても、学校が希望する学年や教科、単元等の調整を早めに行うようにする。
シラバスレベル	特になし。三島小学校との遠隔授業を継続するとともに、他地域の学校との遠隔授業を実践できるようにする。
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・有 【変更内容　　前期から後期に移動　　】 ③その他（特になし　　）
主なテキスト	印刷物を配布
前年度からの改善点	日本科学未来館と接続して、専門施設との合同学習を体験させた。

講義名	道徳の授業デザイン論（選択）	2019 年度第【T3-4】開講	
担当者	假屋園昭彦	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	道徳の授業構築に必要な心理学，哲学，倫理学の理論を理解する。理論と実践の関係について自覚と理解をもってもらう。	最後の 4 週間で，院生に一人 30 分の模擬授業を実施し，その内容で評価した。模擬授業は１回の講義で二人が実施した。残りの３０分で協議した。
現	実践には理論面の根拠が必要だという認識をもってもらう。理論はどのように実践を生み，実践はどのように理論を変えるのかを理解する。理論と実践の双方向性を理解する。	
新	理論を学ぶことの意義を理解する。道徳に必要な理論にはどのような分野があるのかを理解する。	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
道徳の授業構築に必要な理論を講義し，理論と実践の関係についての自覚を喚起した。次に，道徳の学習指導要領の内容項目に関連した，心理学，哲学，倫理学の理論を講義した。	全員が熱心に受講し，知識を吸収しようという姿勢が見られた。講義の途中で随時，疑問点が出されたので，一方的な講義ではなく，双方向的なやりとりができた。	心理学，哲学，倫理学の立場から「人間とは何か」,「道徳的価値とは何か」,「問いかけるとはどういうことか」といった根底の問いから，授業で使える発問を考えた。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・）
心理学，哲学，倫理学の立場から根底となる理論を講義した。講義の目的は「実践に理論は関係ない，理論は役に立たない」という発想を払拭することにあった。したがって，理論の内容とともに理論の性質，理論の価値，実学とは，理論と実践の関係について講義した。受講者は熱心に聴いていたし，講義中，随時，疑問や意見も出してくれて，大学院らしい授業ができた。講義をとおして，「この理論をもとに発問を作るとすれば，どういった内容になるか」という提案を行った。最後の模擬授業は講義で扱った理論を発問や授業展開に生かそうという姿勢が見られ，内容のある模擬授業だった。 **＊授業参観者の意見・感想**：授業参観者はなし

改善計画	
実践レベル	評価として模擬授業を導入したことによって，理論を実践に生かす体験ができた。講義内容が具体的になり,考えやすかった。
シラバスレベル	特になし
教務レベル	教務レベルでの，２０１９年度からの変更点はなし
主なテキスト	假屋園の論文のほか必要な資料を随時配布し，必要な文献や理論を紹介した。
前年度からの改善点	２０１９年度からの変更点はなし

講義名	初等・中等教育における協働的指導法開発（選択）	2019 年度【Ｔ２】開講	
担当者	奥山・山元・高味	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共通	・教員の資質能力や指導方法について，様々な観点から考察することができる。特に，異校種・異教科の教員が協働的に授業を設計し，学年の発達・学習内容のつながり等に留意した，指導方法の構築を行うことができる。 ・（小中一貫教育，ICT 活用等）現代的な教育課題に対応する手法を踏まえた学習指導法及び評価方法を提案できる。	授業，授業内における討議等での貢献度，総括レポート

講義の概要	学習者の様子	工夫点
初等・中等の教科領域における学業指導や学習指導の在り方について，児童生徒の 9 年間の学びを系統的・横断的に考察し，本県の重点課題である学力向上の解決に結びつく，効果的な指導法について具体的に開発していく。	・自分自身のこれまでの実践や他授業での学びを振り返る良い機会となった。 ・協働での授業づくりを実施したため，それぞれの経験や知見を生かしつつ役割を分担し、意欲的に取り組むことができた。	共通科目や実習との関連を図り，院生の過重負担にならないよう興味・関心に応じた探求及び発表を実施した。終末では，校種を超えて協働的な指導法開発に取り組み，発表・討議させることにより，実践的な力量形成を図った。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

シラバスでは，新学習指導要領，カリキュラムデザイン，アクティブラーニング，多様な評価方法論，小中一貫教育・コミュニティースクールについて学びを深め，系統的・横断的視点を生かした指導法の開発がデザインされていたが，院生の負担等を考慮し，他授業や文献，これまでの実践等を各自が振り返り，現職教員学生及び学部新卒学生それぞれの興味・関心に応じた課題を設定し，発表する場を設定した。また，初等・中等教育における協働態勢を推進する上で，相互乗り入れ授業を実施している長島町立獅子島小中学校での学びが有効であった。

※共同担当者のプチ・リフレクション……授業においては，重点領域実践実習Ｉと関連させ，校種を超えて協働的な指導法開発に取り組むことができ，実際に実習において実践できた授業もあり有意義であった。来年度以降の重点領域実践実習の事前指導の充実をいかに図るか（手段、時間、場所等）検討していく必要がある。

※参観者の意見・感想等……実際に、本校（獅子島小中学校）に来ていただき、大学の様子や他校の情報などをうかがうことで協働的な態勢で指導方法を改善・構築する機会となった。

改善計画 → 令和 3 年度に向けて次年度は不開講	
実践レベル	特になし
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　令和 2 年度は不開講　　）
主なテキスト	必要に応じて配布
前年度からの改善点	重点領域実践実習Ｉでの授業を想定した取組の充実を図った。

講義名	特別活動の理論と実践（選択）	2019 年度【Ｔ４】開講	
担当者	髙味　奥山　山元	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	特別活動の意義や特色を理解することができる。	調査結果から，望ましい集団活動のデザインを作成し，発表を行うことができたかを評価する。
現	特別活動の事例や特別活動の意義や特色を，多角的に分析できる。	
新	特別活動の意義や特色を理解し，集団活動をデザインする力量を形成する。	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
特別活動の理論（学習指導要領の確認，歴史的展開の整理，文献の読解等）を学修した後，特別活動についての調査をデザイン，実施した。その調査結果の分析から，よりよい集団活動を構想し，発表し合う（相互評価）とともに，そのアイディアをアイディア集としてまとめた。	受講者数は少なかったものの，毎回の課題（文献を読み感想等を語り合う）や振り返りシートを欠かさずこなすとともに，互いのウィークポイントを補い合いながら意欲的に学んだ。	・県教委義務教育課の指導主事を招聘し，特別活動に関する最新の国の情報，授業づくりについて学ぶ機会を作った。 ・manaba に提出した振り返りシートを次回の講義の導入で扱い，学びを共有させた。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

本講義は，実務家教員３人で担当している。「特別活動の理論と実践」の理論部分を受講生に保障するために，昨年度に引き続き，３・４時間目「研究者教員の知見に学ぶ」と題し，廣瀬先生をゲストティーチャーとして招き，講義を行ってもらった。また，「Input Time」と題し，言葉の定義から考えたことなどをまとめさせ，語り合うという時間を設定した。教員も含め少人数であったが，これまでの経験等を紹介したり，学習指導要領の関連ページを紐解いたりしながら，互いの考え等を交流することができた。

また，特別活動についてのインタビュー調査では，多くの調査対象を確保するために，中央食堂に行って他学部生や従業員にも直接インタビューしたり，Google フォームを活用したりする様子も見られた。その中で，調査の大切さや難しさを感じたり，結果をどのように活かしていくのか考えたりすることで，特別活動についてより深く学ぶことができたようである。

※共同担当者のプチ・リフレクション

新学習指導要領の内容を，これまでのシラバスとどのように関連付けながら充実させていくか（例：キャリア教育など），今後更なる検討が必要であると感じた。

※参観者の意見・感想等

実務家教員が担当者を務める授業であったが、研究者教員をゲストティーチャーとして招いて、両者の持ち味が出るような構成にしてあったことが強く印象に残った。

授業自体は、その回の授業の流れや目的を明確に示した上で始まり、紙の資料だけでなく視聴覚資料の活用もあり、入念な用意があった。流れにもストーリー性があり、知的好奇心を刺激する内容であった。また、討議の内容も焦点化されており、見習いたい工夫ばかりであった。

改善計画	
実践レベル	理論部分も大切にしようと、情報提供に努めたつもりであるが、受講生の振り返りの内容からもう一つ深まりがないように感じた。研究家教員との連携を更に図っていきたい。
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・第４タームから第３タームへ ②曜日や時間の変更の有無・・・なし ③その他・・・なし
主なテキスト	○河村茂雄編著（2018）「特別活動の理論と実践」図書文化 ○日本特別活動学会編（2019）「キーワードで拓く新しい特別活動」東洋館出版社

講義名	現代の教育課題に対応した指導法開発（選択）	2019 年度【Ｔ３】開講	
担当者	山元・奥山・髙味	みなしの有無	無

目標（シラバス）		主な評価方法
共	現代の教育課題の中から、学力向上、授業改善、生徒指導、危機管理等を取り上げ、それらの現状と課題について理解を深めると共に、現代の教育課題に対応しうる指導法開発を実現するため、受講生の関心に基づき教育課題のテーマを設定し、その課題解決に向けて協働的に考察しながら、「社会に開かれた教育課程」の実現を見据えた教育活動や授業を計画し実践するための、実際的な知見と技法を習得する。	・授業後の manaba へのレポート提出 ・授業分析や学力向上対策に関するレポート ・１頁読書への取組 ・現代の教育課題に関するプレゼン発表
現	現代の教育課題の解決に向け、学校における組織的かつ実効性のある取組を進める上での運営の担い手に求められる資質の向上を目指す。	
新	現代の教育課題の背景や要因、学校教育に求められる課題解決の在り方について理解を深める。	

講義の概要	学習者の様子	工夫点
多様な現代の教育課題の中から、受講者の校種等も踏まえ４つのトピック（鹿児島県の学力、生徒指導、学校安全と危機管理の現状と課題）について、具体的な事例等に触れながら、課題の把握と指導法や授業の在り方を追究するための情報提供を行った。さらに、自己のこれまでの実践、関心から教育課題を１つ取り上げ、その背景、現状、対応の分析とその課題克服に向けた具体的な教育活動、授業計画のデザインを試みた。	・受講者は８人（現職４、ストマス４）であったため、幅広い視点で相互に学ぶことができていた。 ・最後のプレゼン発表では個々の関心に基づいた教育課題をテーマとしたため、バリエーションに富んだ発表がなされた。	・自校の教育課題把握の手法として SWOT 分析を試みたところ、実際に原籍校で実施した院生もおり、効果を確認できていた。 ・センター提携研究協力校（山下小学校）の研究公開にも参加し、各自の授業分析の結果を発表し合い、学びの姿の捉えを互いに確認できた。

主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）

当初のシラバスでは、グループ毎に教育課題を１つ決め、その解決に向けた指導法開発の討議と発表の計画であったが、担当者として指導法解決に向けたアプローチに自信がなく、教育課題の現状把握が中心となる講義内容としてしまった。そのため、教育課題の解決に向けた指導法に関しては深まりがなく、教育課題を広く捉える程度の学びになってしまった。教育課題に関する個別のプレゼン発表においては、受講生の半分がストマスであったことから、教育課題に対する指導法解決の提案レベルまでは求めず、背景や現状と対策といった観点でまとめてもらうことにした。各受講生のプレゼン発表について、もう少し協働的に検討する時間を確保すべきだったと反省している。

※共同担当者のプチ・リフレクション

昨年度から導入した１頁読書については、１頁の内容で理解できない点を様々な資料を読み解いて深める姿が見られ、思った以上に意欲的であった。

※参観者の意見・感想等

受講生のストマスが、ストマスならではの視点で、現代の教育課題を捉え、現職院生に刺激を与えていた。ストマスには高度化と思われる内容も、講義の運び方で効果的になると思う。

改善計画　→　令和３年度改組に向けて次年度は不開講	
実践レベル	特になし
シラバスレベル	特になし
教務レベル	①開講期の変更の有無・・・無 ②曜日や時間の変更の有無・・・無 ③その他（　2020 年度は不開講　）
主なテキスト	よくわかる授業論（ミネルヴァ書房）　その他必要に応じて資料配布
前年度からの改善点	最後のプレゼン発表のテーマを個々の興味関心に基づいた教育課題に変更

６．教育相談Ｄａｙ

教育相談Ｄａｙとは、学生一人ひとりに対して面談の場を設定し、学習の状況や環境について話し合うことによって､学生の学びを深めるとともに､教職大学院の教育改善に役立てる取組である。学生一人につき 30 分間程度、教員２名で行う形式を基本とし、本年度は、次の日程で実施した（対象は１年生の 13 名)。

＜実施日＞
第１回 : 6 月 11 日・13 日
第２回 : 12 月 9 日・11～13 日

面談記録をもとに、話題にのぼった事柄を分類した上で集計したものが、下表である。各学生の学習上の関心内容や困りごとについて語り合うだけでなく、要望事項や学びの手応え等についても聴き取っている。

話題の分類項目		6 月	12 月	内容（一部）
学習面	探究課題について	5	12	関心内容、進捗状況、テーマ選択の迷い、勤務校の課題とニーズ
	授業について	1	2	関心内容、レポート作成状況
	実習について	3	4	取組内容、検証授業への意気込みと不安
	学習環境について	9	9	デジタル・ポートフォリオの使用感、学会・研究大会への参加報告、要望事項（行事予定や課題の詳細についての早期周知、オフィスアワーのさらなる拡充・コピー機設置等）
	院生間の協働について	5	11	学卒院生と現職教員院生とが一緒に学ぶことによるよい刺激、人間関係での工夫・気苦労
	全般的な手応えについて	9	6	理論や文献を踏まえて考える大切さが分かった、省察する姿勢が身についた、アウトプットすることで深まっている
学習面以外	心身について	4	1	持病、体調
	生活状況について	7	6	家庭状況、アルバイトの様子
	進路・今後について	0	5	志望先、キャリア形成

７．授業参観週間

（１）目的

・ＦＤ活動の一環として行い、特に『教職大学院設置計画書』内のＦＤに関する記載への対応をさらに充実させる。具体的には、教育改善に関わる「情報共有システム」の整備において、「相互に講義を見学し合い、検討し合う」活動を拡充すると共に、その記録の仕方を整える。

・教職大学院教員だけでなく、教育学部教員にも積極的に参観してもらい、授業改善に関してより多様な見地からの検討ができるようにする。

・教育学部教員にも参観の対象を広げることで、教職大学院の授業科目の特色に関する理解をさらに深めてもらう。

（２）実施期間

第１回：7 月 16 日～19 日・23 日～26 日

第２回：12 月 2 日～26 日

（３）実施方法

・参観者は、教育学部教員及び教職大学院教員。

・原則として、期間中のすべての教職大学院の授業科目を参観可能（実習科目を除く）。

（４）授業参観報告書（一部）

○第１回（学部教員によるもの）

令和元年度 教職大学院 第１回 授業参観報告書	
記入日	令和元年　７月　１７日
報告者名	浅野陽樹［学部教員］
授業参観日	令和元年　７月　１２日（　火　曜日）　２　限
授業参観科目名	教材研究、指導方法、評価に関する実践的課題とその改善
授業担当者名	山本、溝口、高味、假屋園、原田
参観した授業についての感想･意見	
ビデオ会議システムを活用した「小規模校-極小規模校間の遠隔合同授業」をリアルタイムで参観（視聴）することができたため、ICT活用時の利点、欠点、注意点等について実際を基に具体的に理解することができた。また、このような遠隔教育の利点を解説するとともに、視聴後の学生からの感想・疑問を基にして、例えば、意見交換する２つ学校は共にメリットがあったのかといったICT活用時の注意事項、また遠隔授業で見えてきた課題が通常授業にもあてはまるのではないかといった授業力アップの視点などの説明があったために、ICTを活用して教材開発する際の利点や課題を実践の具体をイメージしながら理解することができた。リアルタイムに参観するための日程調整、skype活用、またカメラ・VRの活用等の準備は大変だったと思われるが、実際を見ることの重要性を改めて感じた。この点、自分	

の授業でも手を抜かずに準備していきたい。
　強いて改善点を述べるならば、遠隔授業視聴前に、学生側に持ってほしい視点（マイク等ハード面の活用方法、教員の関わり方、子ども目線での改善方法、接続形態によるメリット・デメリット等）の指示があるとなお良かったように思う（あえて言わない、受講生はすでに参観の視点を持っていたのかもしれませんが)。
　最後に、ビデオ会議システム活用の実際を見ることができたこと、ICTを活用する際に生じる課題が具体的に見えたこと、自分の授業にICTを取り入れることの有用性が見えたことなど、自分の授業改善につながる多くのヒントを得ることができました。楽しかったです。有難うございました。

○第２回（教職大学院教員によるもの）

令和元年度 教職大学院 第２回 授業参観報告書	
記入日	令和元年　１２月　３　日
報告者名	髙味　淳［教職大学院教員］
授業参観日	令和元年　１２月　３　日（　火　曜日）　１　限
授業参観科目名	学校安全と危機管理
授業担当者名	黒光・関山
参観した授業についての感想･意見	
この講義を通して、特に以下のような工夫等が印象に残った。 ・第１回目の授業ということもあり、この授業の目的や内容をはっきりと伝えることで、これからの学修について受講生が見通しをもつことができた。 ・これまでの災害の様子や防災の仕方について、外部講師(気象庁職員)を招き、専門的な知見を提供していた。 ・音声付きの動画や資料、パワーポイントのスライドなど、多彩な方法で情報を提供することで、受講者の理解を効果的に促していた。 ・避難の仕方など、シミュレーションができるようなワークシートを用意し、主体的な学びができるように工夫されていた。 ・グループ協議の班編制は３、４人グループで、人数的に話し合いやすい環境であった。今後の自身の講義に生かしていきたい。	